†魔王降臨曲†

夜杯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
†魔王降臨曲†

【Ｎコード】
Ｎ２６５６Ｃ

【作者名】
夜杯

【あらすじ】
私の普通の、平穏な毎日を壊す奇妙な夢。これが始まりだった。

プロローグ（前書き）

プロローグ

プロローグ

私は夢を見ている。辺りは何もない暗闇の世界。音も聞こえず、光も届かず、自分が立っているのか座っているのかさえ判らなかった。

ただ判るのは自分がここに存在しているとゆう事だけ。

ただただ何もせず何処を見るでもなく暗闇を見つめていた。

（ここはなんなんだろう？）

声を出したつもりだったのだが自分の声が聞こえない。

唯一その声に反応したのか目の前に白い靄が浮かび上がる。　確かに光っているが自分の姿は浮かび上がってはこなかった。

『フフフ……。』

その白い靄は確かに笑った。続いて白い靄は7つに別れ、人型へと姿を変えた。

それとなく見た事ある風貌だったが全員誰だか思い出せない。

『おい…。○○○よ。何故……？何故何もしない…。私達は…。』

何を言ってるんだ……？　　しかし私の考えとは別に口が勝手に開く。

（お前は○○○を○したんだ。　今は何も出来ぬが覚えておくがいい。

私はお主ら7人を決して許しはしない。近い内、必ず復讐を果たす。その時まで怯え暮らすがいい。）

この時初めて自分の体を見る事ができた。

しかし、それは喜びではなく絶望や悲しみ、怒りと苦しみを感じた。

体はバラバラに切り裂かれている。正確には7つの肉片になっている。

自分は自分の体を見下ろす形で見ていた。

なんだこれは？
７つの人型はその肉片を１つずつ持ち去って行く。
そこで私は意識を失いながら…。

コノニクシミ、フクシュウノモトハラサネバ！

遠く離れた場所から声を聞いた。

プロローグ（後書き）

これが初の小説です。まだまだ下手ですがよろしければおつきあいください。これからもお願いします。

第一話　不幸を呼ぶ……。

私は飛び起きた。

何故飛び起きたのか……。まだ胸の辺りにあるこの煮えたぎるような怒りと憎しみ……。

夢で何故こうも苦しまなければいけないのだろうか……。

あれを夢だと割り切るのは簡単だが現実味がありすぎた……。とてもそんな簡単に片付けてはいけない気がする。

こんな日に限って……。

「はぁ、着替えるか。」

冷や汗だろうか、ビッショリになっているパジャマをきたまま、タンスから下着、クローゼットから制服を取り出す。

着替えを持ち階段をトントンと小刻みに降りて行く……が、ズルッドスンッバタンッゴンッ！！

「いった～！！」

今日に限って階段を踏み外した。しかも最後に頭までぶつけたし。

「今日は厄日かな……。」

うっすら涙を浮かべ、ボソリと独り言を漏らしながら両親がいる部屋へ行く。

「父さん、母さん。おはよう。」

「ああ、おはよう。大丈夫だったかい??また階段から落ちたんだろう?」

ニッコリと笑いながら広げた新聞を閉じる。毎朝必ず見ている所が何だかオヤジみたいでヤダ。

「あんまり大丈夫じゃないかも……。」

父さんの問いに苦笑いをするしかなかった。

「お父さんも言ってくださいよ。この子はもう少し落ち着いて行動すればドジ踏んだりしないんですよ。」

（……いやー、あれは不可抗力でしょ。）と思いつつもなんだか自分が悪いような気がしてきた。

「母さん、朝ご飯用意しといて、シャワー浴びて来るから。」

「はいはい。」

何気なく見たテレビでは丁度占いをやっていた。

『今日の一位は乙女座。一日何をやっても失敗しないでしょう。いつもアンラッキーな人もラッキーな日を過ごせます。ラッキーカラーは……』

……占いなんて……。

とりあえず挨拶を終えてシャワーを浴びに行く。

こんな汗だくのまま着替えるなんて考えたくない。

シャワーを浴び汗を洗い流し、何となく鏡を見てみたりすると、いい体付きだと思う。……なんて自分で言い出したらナルシス確定だなと自虐してみたり。

風呂場を後にし、そそくさと着替えを済ませる。

今日は何だかついていない。なにが起こるか判らない中、のんびり着替えなんかしていられないと心底思う。

制服を掲げてみると毎日着ていたこの制服とも今日でお別れと思うとなんか哀しくなった。

思い返せばいろいろな行事なんかも殆どこの制服を着てやったのだ、思い入れがあるが、明日には近所の小学生にあげてしまう。

（！、っとヤバいヤバい……。思いでに浸っている場合じゃない。早く着替えを終わらせよう。）

シャツのボタンをはめ、スカートを履こうとし、足を引っ掛けてそのまま前に倒れていく。

「いやぁ〜〜〜！！！」

見事に顔面をぶつけた。そして丁度タイミング悪く父が来た。

「美鶴〜、早く準備しなさ……。パンツ見せて何やってるんだい？」

私の体制は顔面うつぶせにお尻をあげ、膝断ちの状態。　ハ、ハズいぃ〜〜〜！

「あ、あぅぅ……痛い……。」

朝からとんだ災難続きだ。　このままいくともう一度ありそうで怖い……。

着替えを終わらせる頃には私が予想していたより二十分も遅れていた。

おかげで頼んでおいた朝ご飯も冷えていた。

なんだかやるせない気持ちになってきた。

朝ご飯を片付け終え、歯磨きにいく途中に奇妙な声を聞いた。

『まだかい？もういいの？始まるよ？君の……が。』

「なっ！？」

その声は頭の中に響いたと同時に右目に激痛を感じた。

「ぐっ！ぐぅぅっ！！な、なんだ！？」

『始まるよ……。イクシス……。』

「な、んだ…と？」

痛みに頭が回転しない。イクシスって……。　痛みに体がふらつき仰向けに倒れる。

「どうしたんだ美鶴？……なっ！！これはっ！！！！…くっ！母さん！！美鶴を見ててくれっ！！私はアレを取ってくるっ。」

私は薄れゆく意識の中父さんの真剣な所を初めて見た。

「美鶴……。頑張って！」

母が手を握ってくれる。それだけで痛みが安らいだ気がした。

私は母に見とられ意識を失った。

気がつくと居間にあるソファの上に寝ていた。　ゆっくり起き上がると回りには父さんと母さんは居なかった。

顔に異物感を感じ触ってみた所、革のような手触りだったが、自身をうつす物は見当たらないので部屋を移動した。

隣りの部屋には父さんと母さんがイスに腰掛けテーブルを挟んでうつむいていた。

「なにしてんの？」

「美鶴！！……大丈夫かい？」

「うん。それより今何時？私どれくらい気絶してた？」

「大丈夫だ。まだ五分しかたってない。まだまだ間に合う。所でまだ眼は痛むかい？」

「えっ？」

反射的に右眼に触れようとし、革のなにかに触れる。痛みの事などすっかり忘れていた。

「それは美鶴の右眼を封じる物だ……。外したりしないでくれ。」

父さんの真剣な表情に驚いた。

それから少しの間沈黙したが、耐えきれなくなったのか母さんが口を開く。

「……ほ、ほら。早く用意しましょ。」

「そうだね。美鶴には帰って来たら眼の事を話そう。」

そう言った父さんの顔にはいつもの笑顔が戻っていたが何となく不安げな顔つきだった。

もう不幸なのは今日だけではないと何となく判った。

この右眼は不幸を呼ぶものだと……。

第一話　不幸を呼ぶ……。（後書き）

どうも夜杯です。毎回文章が下手ですいません。ですが下手なりに自分の物語が伝わったらなと頑張っています。こんな私ですが最後までお付き合いくださる事を願っています。

第二話　終わりから始まった

気絶していたのは五分程らしいがそれを抜いてもかなりのタイムロスになっていた。

このままでは遅刻してしまう可能性すら出て来た。

家の中ではドタバタと騒がしい……が、焦りすぎて用意が全然進まない。

結果、学校に着いたのはチャイムがなるほんの2、3分前だった。本来はこの時間、友人と最後の会話を楽しんでいるはずだった。

校舎の中を上履きが当る激しい音が鳴り響くがそんなことを気にしている程時間も余裕もなかった。

ただそれと同時に変な違和感も感じた、何だか体の様子が違った。外見的ではなく、内側が変わってる気がした。

そんな事を気にしている内に教室は目の前に迫ったが、次の一歩を出した時、何もない廊下で見事に転んでしまった。

「い…痛ぃ～。」

地面と違って擦りむいたりしないかわりに硬い廊下は骨にダイレクトにダメージをくれた。廊下に倒れた音で教室から何人かこちらを見て笑っていた。

「アハハハハッ！おい、美鶴がまた転んでんぞ！」

「美鶴のおっちょこちょい！！」

「何か足を引っ掛ける物がありましたか～？」

言いたい放題いってくれるね～。

「うるさい馬鹿共！」

体を起こして皆を見ると、それまで笑っていた皆は急に笑いを止めた。

「それどうしたんだ？」

「えっ？」

「黒いベルトだよね？」

「……ああ！これベルトなんだ？見てないから分かんなかった。」手で触って見ると確かにベルトのような手触りがする。

「う～ん、私も分かんないんだよね……。朝にさ……かくかくしかじかって事があって。」

「そうか……大変だったな……ってかくかくしかじかってなんだよ！！馬鹿にしてんのか！？」

そんな事言われても私自身よく分かってないんですよコレが。

「説明の仕様がないんですよ。それより先生来るよ？」

言った時には既に廊下に先生の姿はあった。

教室内ではやはり私のベルトが話題に出ていた。さらに

「蒼乃条。この後生徒指導室まで一緒に来なさい。」

と、先生に呼び出された。

まあ、これが当然の反応だと思う。友人や先生の立場になれば私みたいな生徒は気になる。

「それでは9時に体育館前に集まってください。委員長、号令を」

「きりーつ！礼！」

ホームルームは私を除いた生徒全て無事何ごともなく終わった。

「さて蒼乃条、そのベルトどうしたんだ？お前は普通の優等生だったじゃないか！それを最後の最後にそんな……。説明してくれるね？」

さっきもいったが私も何が何だか……、先生にはいってないけどね。こうなったら親に何とかしてもらうしかない、それ以前にこれしか選択肢が無い。

「私も分からないので両親を呼んでもらえますか？」

「？……そんな訳ないだろう？蒼乃条自身が着けているんだから分からない訳ないだろう？」

（そう言われても……）と思考を張り巡らせていた所突然扉が開き両親が入って来た。

「これは蒼乃条さんのご両親……あの、美鶴さんのベルトの事なんですが……」

「分かってます。説明致しますので、さぁ、美鶴は皆の所に戻りなさい。」

父さんがいつも通りの笑顔で言った、ただうなずいてみせ、指導室を出た。

この時、私の人生設計が一気に崩れる事になるなんて知らず、のほほんと中学最後の卒業式を受けた事を知ったのはこの日から三日後だった。

周りは私の顔を見て何かを話したりしているがそれを抜けば普通の卒業式だった。

泣きはしなかった。別に友人と一生の別れではない。会おうと思えばすぐに会える、思い出も消える訳ではない、そう考えると悲しくはならなかったからだ。

帰りは担任と最後の会話を交わし、校舎から両親と並んで校門まで歩いた。周りには後輩たちが泣いたり笑ったりしながら送ってく

れている。

そんな中私にもかわいい後輩がいて、元気に送り出してくれた。中にはここぞとばかりに告白までしてくる奴もいたが私のめがねに掛かる奴もいなかったため断った。

告白されるハプニングもあったが、充実した卒業式を迎える事ができた。

その後、まさかこれで平凡な日常生活が終わるなんて考えもしなかったものだから、この後高校生になって私はいろんな意味で大きく変わった。

第二話　終わりから始まった（後書き）

下手ですいません。でも話は分かりやすくしているつもりです。夜杯はこれ以上頑張れません。拙い文章ですがお付き合いくださる事を願っています。

第三話　入学式のない高校生活（前書き）

主人公が美鶴ではなく翔になっている話です。特に意味はないです。

第三話　入学式のない高校生活

「皆さんおはようございます。入学式から一週間たって少しはこの学校にもなれたと思います。そんななか皆さんの知っている通り、このクラスには1人登校していない人がいましたが、今日、来たので自己紹介してもらいます。美鶴さん入って来て。」

担任に呼ばれて入って来たのは朝から有名になっていたあの美人だった。有名になったのはその外見。誰もが認める美人、顔に巻いてあるベルトはある人にとっては神秘的な謎があってよし、またある人にとっては怪しい、など。

有名になったのだってただ美人だから、なんてのは校内にすぐ広まるような話じゃない。広まった理由は美鶴のとった行動にあった。

美鶴は腕を胸の下にくみ、ズカズカと教室に入って来て

「浅倉中学出身、蒼乃条美鶴（あおのじょうみつる）。趣味特技は特に無し、あえて言うなら寝る事。よろしく。」

黒髪が首筋の所でまとめられ腰まで伸びていた。顔には黒いベルトが巻かれ、少し長めの前髪から覗く顔は白くてとても美しかった。身長は結構高めでスラッとした体は綺麗だった。

そんな美人の目茶苦茶簡潔な自己紹介が終わり、一週間遅れて登校した怪しい女子ははれて自分の隣りの席になった。いや、押しつけられた。

蒼乃条とゆう女子は何だか不機嫌な感じだった。下手な事言った

らそれこそ起こりだすかもしれない。

我ながら少しばかりの不幸を感じ、この先どうしようか悩むばかりだった。

この美人が不機嫌な理由を聞いてみようか考え、地雷だと分かったがあえて踏んでみる事にした。たとえ怒りを受けたとしてもその分親しくなれる気がした。恐る恐る話かける。やはり恐いんです。

「あ、あのさ、蒼乃条？」

「……美鶴でいい。」

怒りにムスッとした顔も綺麗にみえる。

「は、はじめまして。僕は秋山翔（あきやま しょう）って言うんだけど」

「翔でいいかしら。それで何？」

いきなり呼び捨て、まあ美鶴と呼び捨てでいいと言われたからお互い様か、

「いいけど。じ、じゃあ……美鶴？何で……そんな不機嫌なの？こう、なんて言うんだろ……僕はこの学校に来た日すごく嬉しかったけど……美鶴はそうでもなさそうだよね？」

女子を名前で呼ぶのは恥ずかしかったがすぐにその恥ずかしさは、恐怖に書き消された。

「これが不機嫌にならない筈がないだろ！」

教室内ではまだホームルームの最中で声を荒げた美鶴は注目の的だった。

「これは失礼。」

美鶴の切替えも早かったが。

「怒鳴って悪かった。詫びとは言わないが聞かせてやる。」

中学の卒業式を終え、両親と共に車で帰る。帰っている中、両親のどちらも私に話かけてこない。それが何となく嫌な予感がした。実際それは災厄を招いた。自宅に入ってからすぐに居間に呼ばれ、座った途端に

「えっ？緋下高校の入学取り消し？」

そこは自分の招来の夢がない自分に取って、いつどんな夢が出来てもその職に付く為の学が学べる、広い選択肢のある高校。まさに理想の高校に私は受かった、なのに取り消しって……。

「落ち着いて聞くんだ。私たちが取り消しにしてもらったんだ。」

父さんが真剣な目で言った。

何で？あの高校に受かった時一緒に喜んでくれたのに？

「何で！？納得のいく説明をしてよ？！」

「……いいかい。そもそも取り消しにしたのはその右眼の事なんだ。」

「何で！別に右眼がこれでも高校を変える理由にはならないじゃない！」

もう立ち上がって声を荒げ怒りを放出するしかなかった。

「ま、まあ、話は最後まで聞いてくれ。いいかい、その眼は魔術を習う者なら誰でも知るであろう魔眼と呼ばれる物だ。この魔眼、代々蒼乃条の家系に伝わって来た魔王の眼なんだが、蒼乃条の家系の役割はその魔眼の持ち主を復活させる事にある。」

「？　まって？魔術がどうのこうのは抜くけどなんで魔王の復活をするの？魔王って悪い奴でしょ？」

自分でも分かる。いろんな物語をよむが大抵悪いのは悪魔の王、魔王に他ならない。

それを復活させるって事は悪を呼ぶのとなんら変わりない。

「確かに魔王と聞くと魔王＝悪い奴としか結び付かない、がこの魔眼の持ち主、〝イクシス〟は違った。彼女は悪さを続ける悪魔を指導し、悪さをしないように導いた。魔王の本当の役割を果たしていったんだ。ところがいつの時代かに魔王は勇者に敗れた。勇者にとって悪魔と魔王はやはり悪の対象でしかなかった。勇者の数は7人、魔王を倒した彼らは魔王の体を七つに分け、一つずつ体に取り込み、未来永劫魔王が復活しないようにした。」

「？　まって？復活しないようにって魔王は悪魔の中から選ばれる

んでしょ？なら魔王はいくらでもいる事になるじゃない。」

そんな質問の前に具体的な事が聞きたかったが、どうしようもない。

「それがそもそもの間違いなんだ。魔王がもし悪魔がなるんだったらずっと悪魔同士の殺し会いが続く事になる。魔王になる絶対条件が魔王に認めて貰うこと。そうすると魔王から魔力と記憶全てを新魔王に渡す。そうする事で魔王は悪魔からかけ離れた悪魔、魔族の王になる事が出来る。だから勇者たちが七つに分かれた力を持っている限り魔王は生まれない。分かるかい美鶴、蒼乃条の家に魔眼が伝わっていると言ったね？」

「じゃあ、蒼乃条の家って勇者の末裔って事？」

「そうだ。ただ蒼乃条は最後に魔王の味方になったんだ。しかし蒼乃条の勇者にも限界はあり、残りの６人に魔王は殺され、七つの内の一つ、頭を当時の蒼乃条家の勇者に無理矢理取り込ませたんだ。魔王の体はそれ自体が呪いに等しい為取り除く事が出来ない。ただ残りの勇者たちは大きな間違いをしたんだ。それこそが頭を蒼乃条家に封印した事、魔王を守る戦いが終わってから取り込んだ魔王と契約したんだよ。復活を望む変わりに私達に手を貸すと。」

話のスケールが大きくなったがやはり高校を取り消しにした理由が分からない。

「でもそれじゃ何で急に魔眼が出たのさ？」

「……勇者の末裔がそろったんだ。勇者になる最低条件が十六才になることにある。それさえそろっていれば勇者の家系は無条件に

勇者になれる。」

「???　勇者って英雄と同じで何か人事を超えた事をしたりした人の事を言うんじゃないの？」

ここまでくると今まで知っていると思っていた知識もほとんどが嘘になってきた。

「美鶴の言っている通り英雄は正しいが、勇者は違う。勇者はこれから起こる災厄に勇気を持ち立ち向かうとゆう事から勇者と言う、つまり腹に抱えた核を次の代に託すまで一生をかけて守り抜くとゆう人事を超す事をする時点で勇者とよばれる。これを成し遂げた者を英雄と言うのだ。」

話がちんぷんかんぷんになってきた。

「だから美鶴は勇者から力を取り戻す事で魔眼は消える。その魔眼はある意味呪いな為、解除出来ない。」

「???　訳分かんないんだけど。」

「つまり平穏を取り戻したければ勇者を倒して魔王を復活させろって事になる。」

「!!!　いや、だから高校にいけない理由が分からないって言いたいの！」

言ってから父さんが驚いた顔をした。

「……理解できたんだ。父さんは理解するのに一週間かかったのに……、ん、まぁそれは置いといて、高校には通って貰う。日本魔術学校と正にな名前の所だが、まぁ気にしないでくれ。」

「……日本魔術学校……？そうゆう学校って魔力があるのが前提条件じゃないの？」

「そうだ。確かに美鶴には魔力を作る魔力源炉がない。だがそれも今日までだ。お前には無限の魔力源炉が付いた。それが魔眼の力の一つだ。」

へぇ～とうなづき右眼をベタベタ触る、あるのはベルトの感触だけだが、

「つまり魔力を持った人は普通の高校には通えないと。」

「理解が早くて助かるよ。さすが母さんの子だ。」

いや、そんな所で納得されても

「もう一ついい？私魔力ってイマイチ分かんないんだけど？」

「そうだな。じゃあ表に出ようか。」

部屋を出て庭へ出る。

「美鶴は魔力って聞くと何を思い浮かべる？」

「当然魔法かな。一般論だと呪文詠唱で理を表し魔力で理に力を足すって事を何かで聞いたけど、」

話を聞いた父さんはなにげにうんうんとうなずいていた。

「まぁあながち間違ってはいないけど少し違うな。
魔法はいくら頑張っても人間には使えないんだ。人間には魔術しか使えない。」

今日は覚える事が沢山だ。

「魔術と魔法ってなにが違うの？」

やはり魔術なり魔法なり使うのなら知識はあっても邪魔にはならない。

「いいかい？魔法は魔の力において法則があるのだがこれを人間は使えない。なぜなら脳が理解出来ないからだ。製法は魔法に使う触媒と呪文詠唱、
さらに脳内にその魔法の法式を書き込み、詠唱が終わるまで制御しなければならない。魔力はおもに法式の制御に使う。かわりに魔術は脳内の術式さえ制御出来れば触媒も詠唱も入らない。魔法は歌いながらピアノを引いて、さらに3枚の楽譜を一枚にまとめる事なんだ。逆に魔術は歌を歌うかピアノを弾くか、或いは楽譜を創ればいい。そうゆう事だ。」

父さんが説明下手だってやっと気付いた自分がいたがとりあえず何となくわかった。

「あっ、でもさ魔術使うのに触媒を使う人もいるよね？」

「あれは想像が足りない魔術師が使う物だ。例えば魔術なら矢で鳥を射抜くのに追尾をかけるとする。想像が豊かな魔術師は矢を精製し、さらにその精製の中間で追尾の魔術をかける事ができる。逆に想像が足りない人は矢を用意するか矢を精製した後に追尾の魔術を

施す。それは粘土に元から色が付いているか後から足すかみたいな差だ。まあ、あえて触媒を使う魔術師も多いけどね。」

微妙に分かりずらいような分かりやすいような感じだった。

「百文は一見にしかずとも言うしな。よく見ておけ。」

父さんが目を閉じ手の平を前に出す。手のひらには今までなかった筈の刺青のような紋章が浮かび上がった。数秒数える内に矢が精製される。それは空間にある塵を集め、矢の形にするみたいなイメージがある。実際は光の粒子が矢になった。それは恐らく父さんの魔力なのだろう。

「これが精製、魔術師には決まった呼び方をしない、私はなくなった物を足すとゆう意味で〝リロード〟と呼ぶがな。やり方は想像が第一だ。想像が浮かび上がったらそれに魔力を通す感じ、そうすると体の一部に存在する魔章紋から体外に魔力が流出す。それを想像した形にすると想像魔術が完成する。」

「ふーん。あっ、左手にあった。なんかカッコいいかも。」

左手にはどこかの家紋のような感じの魔章紋が浮かんでいた。中心の輪から羽根がはえているような感じだった。

私も見よう見まねでやって見る事にした。さっき言っていたが魔力源炉は右眼。そこは蛇口のイメージでそこから見えないコップに魔力を注ぐ。その後脳内に矢を想像し、それに魔力を注ぐ。そこまでやると矢がくっきりと姿を表した。後は魔章紋から魔力が流れ出る感触を感じ、目を明けるとそこには矢があった。

「案外簡単に出来るんだ。」

予想していたより簡単にできた。

「美鶴には魔術師の才能があるな。それじゃもう一つ魔力の使い方を教えよう。魔力源炉は体中にパイプを通している。そこに魔力を通す事によって肉体強化もできる。」

「ああ、それは無理だよ。私の体たぶん既に魔力が流れっぱなしだから。」

この時父さんは唖然としていた。

それから一週間私は独学で魔術を学び、下手をしたら父さんを超えていた。

リロードを使えるようになった後、触媒を使った魔術を使えるようになろうと努力した。あれは使いようによっては最強の武器になる。

魔術を使えるようになったのは嬉しいがやはり納得いかない所もあり、イライラもつもり、二週間たった時には性格自体が少しゆがみ始めた。

そして、入学式の日、自分の想像していた新生活じゃない事に落胆し、五月病にかかっていた。

そして新学期が始まって一週間たち、なんとか学校に通うように立ち直った。

この一ヵ月で魔装をマスターした私は学校までローラースケートで行くことにした。　理由はいい運動になるから、後は自転車何かよりすごく使い道が広い為。

そして今日いきなり伝えられた新事実

「美鶴元気でな。学校は寮性だから。3年間学んでこい。」

「はぁっ?！聞いてないし！」

性格のひねくれぎみな私は昔の私に戻っていたと気付いたがもうどうにでもなれみたいな感じになっていた。

「荷物は後で届けるからな。じゃあ行ってらっしゃい！」

ボストンバックと共に家から追い出された。

新しい制服に身を包んだ私は楽しみ所か不幸が続いて起こるようなきがしてならなかった。

「とりあえずベルトを付けるか」

学校まで二時間ローラースケートで行く、スカートがめくれないようにベルトを重しにしておく。

魔装で強化してあるローラースケートを履き、長い道程を駆け出した。

傍目からみればある意味異様な光景に見える筈だ。自分の体より大きいボストンバックを抱え、汗も垂らさず高速で地面を滑って行く少女。けっこう楽しい光景だと思う。

駅を通りこし走っている電車と同等の速度で滑る。

この速度で転んだらさぞかし痛いだろうが、生憎そんな事が起きる筈がなかった。

魔術は使い方によっては本来の物理法則を簡単にぶち破れる。まぁそれは無限の魔力を持っているのが最低条件だが。肉体強化を少し変え、皮膚の耐熱。ローラースケートの魔装では車軸に物理的強化をし、本来の概念を無理矢理変えた。結果地面は地面から約５ｃｍ上とゆう概念が出来、空中を走っている事になる。

つまり、今やこのローラースケートは地面から約５ｃｍ上を滑る道具となっている。　これで肉体強化をしているのだから簡単に電車においつける。

当然電車に乗っている学生は驚きを隠せない。普通ならこんなに魔術を使ったら三分で魔力が切れる。だが私は既に八分は電車と共に走っている。

このまま進み、二時間後には学校に付いた。校門と駅は三分とゆ

うかなり近場で回りはいろいろな店があった。商店街みたいになっているその駅と学校をつなぐ道を進み、校門にたどり着く。

学校を見た私は驚くしかなかった。ものすごい広さをした学校だった。

これが日本じゅうの魔術師が通う学校。私のイライラもほんの少しだが消えた。

だがそれも束の間、回りの生徒は全て自分をみている。視線が集まる理由も少しは分る、学生にとってはまだ魔術なんてテレビでやる手品に等しい。そんな奇異の目で見られ、中には声をかけて来る奴もいた。

「ねえ？君何年生？クラスは？」

「知りません。今日が初登校なもので」

「へぇ～、じゃあさ職員室まで連れて行ってあげようか？」

「いいです、自分で何とかしますから。」

「そんな事言わないでさ！ねっ？俺の顔を立てると思ってさ。」

こうもしつこい奴は殺したくなるね。

「……うるさい！ほっといてくれ！」

「なっ！！ひとがせっかくしたてに出てやってるのに！！」

「それがそもそもの間違い何ですよ。誰もしたてに出てくれ、なんて頼んでないのにしつこく。殺されてーのか！！」

男は語気にビクッとし、そそくさと逃げて行った。それと同時に辺りが静まり返った。

このローラースケートと美人と大声がそろって話が学校に広まった。　この後は大人しく職員室に向かって行き、後はさっきの通り簡単な自己紹介に至ると。

イライラしてるのは両親の話と商店街の話の所みたいだった。

「ねぇ美鶴。ご両親の話はどうしようもないけど商店街での事は勘弁してやってよ。」

「はぁ？あれは翔の知り合いな訳？」

不機嫌に左目が吊り上がる。「い、いや違うけどさ、……普通は注目浴びると思うよ。美鶴は誰が見たって美人何だから……あっ、いやその……。」

本人に向かって美人なんて言ってしまって次の言葉がでてこなかった。

当の美鶴はさっきまで吊り上がっていた左目は今の発言で元に戻り、

「自分で言って赤くなるんじゃね～、」

なんて言いながら少しニヤけていた。

こんな感じで地雷は半ば不発に終わり、予想通りなんとなく友人とゆう目で見てもらえている気がした。

当然ホームルーム中話をしていた僕達は何をすればいいか判らなかった。

こうなっては委員長に助けを求めるしかない。

「委員長～。次何すればいいんですか？」

この一年二組の委員長、相馬龍虎（そうまりょうこ）は振り返った。彼女いわく相手が馬でも龍と虎の気持ちで挑め、とゆうイメージで名付けられたらしい。

名前から見て険しいイメージのある彼女は綺麗なストレートの黒髪美人、顔も美しい均等の取れた美人っぷりで、体もスラッとしていた。そのおかげか最初は言動に痛そうなイメージがあったが

「おっ、翔じゃないっスか、このあとは身体検査を受けて帰宅っス。それと始めまして蒼乃条さん、私は相馬龍虎っス。よろ～。」

すぐにイメージ像を崩してくれる。

美鶴も……みたいな感じで沈黙している。始めはこのギャップ

に驚く事になる。

「……あっ、こちらこそよろしく。」

「いやいや、委員長なんだからいつだって頼りにしてくれって感じっス。」

「それじゃあ龍虎さん、身体検査って身体測定じゃないんですか。」

「いやいや、それが微妙に違ってね？身体検査は魔力測定と魔力源炉の特定、マナの収集率を調べるっス。」

委員長の口癖は〝いやいや〟らしい。しかも二人の会話に混ざれない……。

「魔力測定ね……、測定機が壊れなければいいけどね。」

「あははっ、いやいやそれはないって。」

この後の結果　魔力測定で美鶴は測定機を破壊、もちろん計測不可能な為、魔力源炉の特定は右眼とゆう不可思議な結果、普通は胸部に存在している筈なのだが、そしてマナ収集率においては０とゆう異様な数値、美鶴は魔術を使うに辺り全て自分の魔力で行っている事になる。普通は０なんて出ない。どんな魔術師でもマナの助けは多い筈。

身体検査は波乱に包まれた。

魔術師が集うこの学校においてイレギュラーの中に美鶴が加えられたのは言うまでもなかった。

美鶴とは身体検査を終えて後に別れ、寮に戻った。

自分が借りている寮、名前は『異端者の館』とふざけているが、間違ってはいなかった。

部屋は皆二人部屋を1人で使うと言う無駄な使い方をしていたが、それでも部屋が余っていた。なのに、

「相部屋、蒼乃条美鶴って……」

部屋の扉に張り紙がしてあった。

僕はまたなにかに巻き込まれたようだ。

第三話　入学式のない高校生活（後書き）

どうも夜杯です。毎回ネタはあるんですがうまく話に繋がらない為あくせくしています。毎回下手な文章ですが最後までおつきあいくださる事を望んでいます。ありがとうございます。

第四話　目的は遠く長い道

身体検査を無事？に終え、帰るに帰れない事を思い出した。寮はどうなるのか聞かなければならない。職員室に歩みつつ
（翔と一緒だといいな。）と思ったが。

「？　なんでアイツが出て来るんだ？」

声に出して言ってみても分からない。

クラスになじめない私の唯一の友だからだろうか。それとも気になっているとか、いやそれはないな。確かに顔はそれなりに整っていて決して不細工な訳じゃない、
が協調性にかけると言うかなんと言うか。

う～んと悩むばかりだった、そしていつの間にか担任の飯塚良子（いいづか よしこ）先生の前にいた。と言うか飯塚先生は私をみていたようだ。

「先生、私に何か？」

質問してる場合じゃないのだけれど、つい私を見ていた事を聞いてしまった。

こんな話をしたらそれこそ時間がかかる。今は寮の場所だけ聞いてすぐに休みたいのだ、魔力は底無しだって身体は疲労を覚える。

「ん～？いや～、別に用はないけど？ただ美人は見ていて保養になるな～って」

この人明らかに百合方面の人なんだな～とつくづく思う。

この飯塚良子は入学式の日に宣言したらしいのだ、自己紹介でどもっていたクラスの皆に

「私がまず自己紹介します。名前は飯塚良子です。趣味は女を眺める事、嫌な物はこの世の男全て。以上です。」

こんな事を言ったらしい、女子は入学式の日に不安を覚え、男子は苦い顔をしていたらしい。

全て龍虎に聞いた事だけどあながち間違いじゃなさそうだった。

「先生、私そんな趣味ないですからやめてください。まったく……
…それと私の寮ってどこなんですか？」

「あぁぁ……！言ってなかったわね！」

この先生大丈夫か？と思わせる一面を持っている事が分かった。

「異端者の館よ。」

……新手の嫌がらせだろうか？

「なんですか？　その在り来たりな行き当たりばったり的な名前は。
」

「まぁ、気にしないで？そこは相馬さんと秋山くんがいる寮だから、
きっと助けてくれるよ？」

少しばかり釈然としないがそんな事気に病む事じゃなかった。

この時気付くべきだったと思ったのは寮の前についてからだった。

名は体を表すと言うことわざがあったけどそうでもなかった。

寮にしてはこじゃれた洋館だった。　私的にはボロボロな洋館なイメージだったが、まぁ洋館だというのは変わらないが。

が、中に入ってから脱力した。中には日本風の木造の玄関が待っていた。

中は木造の廊下があり、引き戸の扉が設置され、障子の部屋もあった。

さすが異端者の館。バランス悪いにもほどがある。

ズーンと居心地が悪くなったが和室はそれはそれで過ごしやすいだろうと納得する事にした。

廊下の突き当たりには掲示板があり、『蒼乃条美鶴様が本日よりいらっしゃいます。最高のおもてなしを。　未剣舶妁（みつるぎ はんしゅう）』

……適当な名前だな。

それはさておき、最高のおもてなし。

嫌な予感しかしないのは私だけだろうか？

掲示板にはもう一つ『部屋は右に曲がった廊下のつきあたりにございます。』

このなんとなくあってるのか間違ってるのか分からない言葉づかいが怖い。

廊下を進むが、明らかにおかしい。廊下自体は横幅が人間三人並べるぐらいしかない狭い廊下なのにひたすら長い。つきあたりまで軽く走って二分かかった。

扉には蒼乃条美鶴様と張り紙のされた部屋があり、足元には自宅から送られたであろう荷物がそろっていた。

荷物ぐらい中に入れてくれればいいのに……。

部屋に入った時張り紙が取れ、下から秋山翔の名前が見えたのに気付かないのは当然だった。

中に入って気付いた事が二つ。

この館の製作者、趣味が悪い。部屋は和室とも洋室とも言えず、和洋調和を狙ったのだろうが、まったくあっていない。畳の部屋に洋風の壁紙、テーブルなんかは洋式なのに障子の部屋わけ、だが部屋の広さはそこらの高校の寮より3倍はあった。（といっても最近寮なんかある高校なんてあまり無いけれど。）

それと、人の気配と言うか人の生活感があった。

誰かシャワーを浴びている。鍵はかかっていなかったから、間違ってこの部屋をつかっているのかもしれない。

洗面所に入ると少しばかり湯気が漏れていた。

そのせいで壁にかけられていた制服に気がつかない。

コンコンと扉を叩いて見た、が返事は無い。

変わりにガラガラと扉が横に開いた。

「……美鶴？何やってるの？」

ヌッ、とでてきたのは翔だった、勿論風呂に入っているのだから裸だったが今はどうでもいい、と言うか男の裸に驚く私じゃない。

「それは私の台詞。ここ私の部屋なんだけど？」

「？　表札見てないの？相部屋なんだけど…。」

……？相部屋？

「え？嘘！？」

「嘘なんかじゃないよ？なんか授業のパートナー同士は同室なんだって。」　いや、おかしいだろ。高校生を同性ならまだしも異性を同室にする筈がない。

「誰が決めたの？先生じゃないでしょ？」

「未剣さんらしいけど？」

「その未剣って誰なの？」

「この学校の三年生でこの寮の寮長らしいけど、会った事ないんだ。」

「行くわよ！」

「えっ？何処に？」

「その未剣って奴の所に行くに決まってるでしょ！」

こうなった以上、挨拶をかねて文句言いにいってやる！

三年用の校舎に行くが既に人気が無い。既に無人の様だったが、その人は下駄箱にいた。

初めて見たが直感的にコイツが未剣だと思った。

細めな目に銀髪の前髪をかけ、厚手のコートを着た場違い差を思

わせる奴。

ただ下駄箱にたたずむコイツは何をするでもなく、ただただたたずんでいただけだった。

「やぁ、蒼乃条君。気に入ったかい？秋山君との相部屋は？」

「ええ、感謝するわ。未剣舶妁。」

「よく分かったね。それとそれはよかった。」

にこやかに笑う顔に吐き気を覚えた。

……そしてコイツは自分にとって強敵で仇敵で敵であると感じた。

間違いなかった。

奴は勇者の末裔だと右眼が訴える。

怒り狂っているのか嫌悪しているのか、それとも怯えているのか。

右眼は落ち着かない。

右眼から魔力がとめどめなく溢れ、全身に続く魔力（ライン）回路を通り、

奴は危険だと警告していた。

その警戒を気付いたのか

「別に喧嘩しようって訳じゃないよ？」

「じゃあそのコートを脱いで。」

ズッシリと重そうな革製品らしきコートは何故か気になって仕方なかった。

「……よく気付いたね？その眼……透視（リード）でも付いてる訳？」

「違うわ。それより早く脱いで、それと体返しなさい！」

すんなり返してくれれば手荒な真似はしないし、協力者として見る事も出来るが、それが通るほど甘い奴じゃないと思う

が……

「いいよ。この足は返すよ。」

「！？」

「驚く事かい？僕は別に先代のきめごとに興味ないし、こんなもの要らない。」

なにかよくない事をたくらんでいるとしか思えなかった。

「その変わり……」

ほら来た。タダでくれてやるなんて普通は無い。

この世でタダより高い物は無いのだ。

「戦ってほしいな？明日の朝六時からグラウンドで。もちろん本気でやってほしい。」

何を言うかと思えば……

「勝っても負けてもくれるんでしょうね？」

「もちろん。それでいいかい？」

「受けて立つと言っとくわ。」

「それでこそ魔王候補だ。」

言うだけ言って興味を失ったかのように隣りをすり抜けて行った。

「美鶴……、よくあんな人と話せたね……。」

今まで存在事態消えていたかのようだった翔が話しかけてきた。

「なんで？」

「気付かなかったの？あの人、すごい殺気だってたよ。一歩も動けなかった。」

殺気所か戦う気さえなかったように見えた。

（ってか魔王候補ってなによ。）

「ちゃんと杖用意しといたほうがいいよ。」

おもむろにこんな事を言うのだ。

「はぁ？杖なんて今時の魔女使わないよ？」

漫画の見過ぎだ、と言ったのだが、

「まさか魔術戦なんか考えてたりする？」

「？　違うの？」

「美鶴、それじゃ勝負にならないよ？まだ神想すら使えないんだから魔術戦にすらならないよ。」

それもそうか、私なんて魔力が無限なだけで他は三級魔術師と変

らない。

「だからって杖があっても変わらないだろ。」

「僕が言ってるのは木でできてる棒状の杖じゃなくて杖(まぐ)の事、昔の魔術師は魔法さえ使いこなせたから杖でなんとかなるけど僕たちは三級魔術師とゆう三流なんだ。だから魔術をねじ伏せ、魔術を防ぐ魔装か呪いを伴う魔具の類を用意しないと。」

「なるほど。」

攻撃にも防御にも使うから杖ね……。

「もしかして伝家の宝刀的な物が無い……とか。」

「無いわよ?」

とりあえず自室で対抗策を練る事三十分。何も浮かばず、杖(まぐ)を精製する事にした。

自分の中に一番イメージしやすい武器と言われれば当然包丁やらナイフやらだった。用は刃物の部類、その中で一番武器らしいのは剣だった。刀か剣かと問われれば剣を浮かべる。使い道は当然破壊。それなら刀身は太く硬く長く削り取る剣がいい。突く剣ではなくただ切り壊す。少し違うが理想は電動鋸。回転する刃は相手を削り取る。

想像魔術は想像が細かければその分理想的に精巧に生み出される。
刃は回転し削りとり、魔術で精製される物をただ切り刻む。刀身は長く両刃で柄はがっちりと握りこめ、回転する魔術は魔力章紋と繋げる。

そして出来上がった想像魔術は柄だけ剣のようなナイフだった。柄からは鎖が垂れている。本来なら三流魔術師には想像魔術すら成功させられないほどの魔力を費やす剣。

三流魔術師の私にこんな物は普通は創れない。

それもこの右眼のおかげ、不幸の産物によるものなのだけど、やはり元々魔術師の体では無い為か、家で魔術の自主練していてもこれだけの魔力を魔力回路（ライン）に流せば馴染んでいない魔力回路（ライン）は焼け、体への負担が大きかった。

頭痛を伴う頭を動かし翔に確認を取る。

「翔、これなら行ける筈だ。」

「そんなナイフで？」

「これは魔剣だ。なんとかなるよ。」

これは私だからこそ使える魔剣、きっと大丈夫だ。

「じゃあ、これは僕から」

渡されたのは竜の角を見立てた片角のカチューシャに左肩、左腕を守る鎧、両足用の鎧、爪先には竜を想像させる爪が付いていた。

「それは美鶴が使って。ただ堅いって呪いの防具だけど無いよりはいいでしょ。」

「いいのか？」

「僕にはいらないから。」

要らない物なら持って無いだろう、

と思いながらもせっかくの好意、

「ありがとう。」

せめてもの恩返しに何かしてやろうと考えた結果が夕食の用意だった。

しかしそれは意味がなかった。

自分的に料理は得意だと思っていたが、翔はさらにその上を行っていた。

武器を想像していたのは少しの間だと思っていたのが聞いて驚き、二時間たっていた。

居間に移動すると既に準備をしてある夕食が待ち構えていた。

悔しいが味は私より上だった。

２ＬＤＫある部屋は寮とゆう規格を打破る大きさで、ただ豪勢だなと思うだけだった。

そして次の日は初の戦闘、戦いなんて好まない私が……こんなにも高ぶりを感じるのか。

約束の六時にグラウンドに行くと未剣は待ち構えていた。

が、ギャラリーも集まっていた。

「どうだい？蒼乃条君。ギャラリーがいた方が楽しいだろう。」

「そんなもん？別にギャラリーはいらないと思うけど。」

「ルールはどっちかが降参するか、杖（まぐ）が壊れるかでいいかい？」

「それでいいわ。」

私の返事が開始とばかりに杖を構えた。

奴の杖は２ｍ状の棒だった。ただなんの装飾もない円柱状の棒だった。

私も素早くベルトに刺されたナイフを取り出す。

「そんなナイフでどうするんだい？……まぁ、少しだけハンデをあげるよ。僕はね　無限弾（インフィニティーブレッツ）って呼ばれてるんだ。」

「へぇ～？だから何？それなら私は　破壊魔女（ブレイクウィッチ）とでも名乗るかな。」

掲げたナイフに繋がる鎖は魔力章紋に繋がり、そこから魔力が伝わる。

「それともう一つ、これナイフじゃないわよ？これは……」

構えられた魔剣は魔力を喰らい、真の姿を表す。

ナイフと思わせる刃は３ｍ先まで伸び、

その刃の両側から光の粒子らしき物が緑光を放ち、回転しながら刃にまとわりつく。

この魔剣、電動鋸と大差無い、ちがうのは電力ではなく魔力を使い動くだけ。

「これは全てを破壊する破戒だけの剣、名前なんて破壊剣（ブレイクソード）で十分。

分かりやすくていい名でしょ。」

「……さすが、では始めましょうか。」

ギャラリーは唖然としているのか事の成り行きを見守っているのか一切の会話がなかった。

「〝我が穿つ銃痕は無限の跡〟」

魔術師にはそれぞれ個人に呪文があるらしい。魔法の呪文詠唱とは別に自分に合った呪文は想像魔術にしろ魔装にしろ何にしろそれに対応するための感覚を広げる合言葉である。この呪文を見つけ出す事によって神想（こうそくまじゅつ）を行う事が可能になるらしい。

奴のコートは広がり中は暗闇に包まれていた。

何か待受けているのは分かるがこっちは剣、呪文からして奴は飛び道具なのは明らかだった。

距離にして１０ｍぐらい、攻めるしかない。

重剣を構え奴に駆け込んで行く。

が、

「ファースト、ファイア！！」

広がっていたコートから何かが飛び出してきた。

「！」

動きを停め、後ろに持って行かれた剣をそのまま振り上げ、切り壊す。

魔術で出来ているであろう飛来物は魔力に分解され霧散した。

「今のはちょっとした挨拶だから。」

「余裕じゃない？」

「一年に負けたら恥じゃないか。……ではどんどん行かせて貰うよ。」

「セカンドサード！！セブンスヴレット！ファイア！！」

集中すると十四の銃弾が放たれたのが確認できた。実際の銃弾よりは速度が遅いがそれでも人を殺すのに訳はない。

こうなったら

1、想像魔術による障壁

2、考える事は無い、ただ突っ込むだけ。

そんな二択考えるまでもなく2を選ぶしかない。

私には神想(こうそくまじゅつ)が使えない、想像魔術を使えばそれは狙ってくださいと言っているのと変らない。

今私が信用出来るのは破壊剣と翔の防具だけだ。

十四の銃弾を集中して見切り、自分の線上の銃弾だけ切り壊す。

音もなく霧散していく銃弾を後に距離を詰めるが……３ｍしか進めなかった、これ以上進ませないとばかりに銃弾がさっきとは比べられないほど、百、二百と迫る。

「ワンハンドレッド、コンテニュウシィリー、ファイア！！」

さすがに百単位の弾は防ぎようも無いため横飛びに回避するが、戦闘経験の差かそこに飛び退くのは分かっていたかの様に着地する前に着地点に銃弾が迫っていた、それを剣を重力にまかせ、無理矢理体をひねり、地面に突きたて棒高跳びの要領で銃弾の荒らしを飛び越える。

「よくかわすね？」

「どうせなら…勝ちたいですしっ！」

結果的に攻めれば攻めるほど戦局は不利になる。

あと２ｍ進めればそこは私の間合いだが、それが詰められない。

こうなったらイチバチの掛しかないか……。

こっちの回避策を崩す様にコートから出る銃弾は百の単位と同時にマシンガンの様に毎秒５発の勢いで放たれる様になった。

しかし、それは勝機を見つけた瞬間でもあった。

横飛びした瞬間に重剣を投げ付けた、

「ハァッ！」

「なっ！？」

少しばかり油断していたようで回避が遅れて、２ｍほどしか後退できておらず、既に勝利は確信に変わった。

後は即座に駆け寄りながら鎖を手繰り寄せ、剣を振りかざせばいい、なのに……

奴の焦り顔は何故か引っ掛かるが、それでも何かあったら切札（ジョーカー）を出せばいい。

手繰り寄せた重剣を掲げ、振り下ろす所で

「〝影は光の映す物（ライト シャドーリフレクティング）〟」

奴が使ったのは魔具を使っての転移魔術、

目の前に現れたのは禍々しく深紅に染まった槍。

重剣の範囲に入った私に瞬間的に変化した槍が投げ付けられた。

それは視界で視認させる事をさせない速度で放たれ、重剣が間に合わない。

―――間に合わない―――

―――本来なら―――

放たれた槍は胸を貫こうとし、

左手に掴まれた。

いや、掴んだ。

「！」

「……はぁ、隠し玉はこっちのが上でしたね。」

槍は破壊剣により霧散し、私の勝利は確定した。

この槍を掴んだ左手の鎧、昨日の内に呪いをかけたそれは、全て

の魔術干渉を弾き、魔術を防ぐ盾。

自身に迫る魔術を自動で弾く、または停める。

ただ、この鎧にも弱点はあった。

魔術でできた物体は停められるが、魔術ではなくただの鉄の武器などは停められない。あくまで呪いか想像魔術の産物だけとゆうなんとも中途半端になってしまったが。

まあ、それなりの勝利を飾った私の戦いは未剣と共に三日間の謹慎とゆう結果に終わった。

てっきり許可でも取ってると思ってたのにこの学園では魔術師同士の戦いは禁止、ギャラリーが静かだったのは、見るだけならいいらしい。要は手出し、口出ししなければいいそうだ。

みっちり飯塚先生に怒られ（ニッコリ変な顔で撫でられながら）、どんより気分になった。

翔の事を聞いた所、朝起こしてみたけど結局起きなかったのは、いつもの事で、毎回遅刻ギリギリに登校するらしい。

物腰の砕けたいい奴だけど、変なところが弱い奴だなとつくづく思う。

謹慎処分、タダでさえ遅れている勉強がさらに遅れるのは必須だった。

合計１０日の遅れ、取り返すのは相当大変だと、ますます未剣が嫌いになった今日この頃。

第四話　目的は遠く長い道（後書き）

夜杯です。長らくお待たせした四話です。また分かりずらい所もあると思いますが、勘弁のほどを。これからも精進していくつもりなので最後までお付き合いくださる事、お願いします。

第五話　魔術の基礎

謹慎も解け、やっと学業に入る事ができるようになったのが入学式から１０日後とゆう事が起き、少し自棄になりつつあった。

あの戦いでは結局相部屋の事をうやむやにされ、何も解決にはならず、魔王の体さえ受け取っていない状態だった。

さらに校内では既に私の噂が増大していた。

『一年が三年に喧嘩売った』

売られたのは私です。

『幾月（いくつき）を巻き込んで三年を倒した』

幾月って誰？正々堂々一対一で勝ちました。

『一年が幾月を雇って勝った』

あくまでも私が勝ちました。

『一年じゃなくて二年の幾月とやって未剣は負けた』

まだ幾つかあったきもするけど、全て〝未剣が負けた〟の所はあっていた。

そして度々出てくる幾月とゆう人物は私と同じ日に謹慎になった事で有名になっていた。

教室ではいろいろな話が飛び交い、噂も流れていた。

「おはよう。」

「あっ、美鶴、おはようっす。」

朝からテンションにくるいのない龍虎は見た目のクールビューティー差を一瞬で崩す挨拶をかまし駆け寄って来た。

「おふぁ～あ、よう」

「こら翔、あくびしながら挨拶なんてナンセンスっす。」

隣りで一緒に登校した翔は、顔に青い痣をつけあくびを終えた顔は苛められっ子みたいだった。

顔の痣は無論、私がやったもの。

もちろん許可は取ってある。

「僕は寝起き悪いから起きなかったら殴ってでも起こしてくれない？」

これを言ったのはもちろん翔、だから起きない奴を一発。

それで驚いたのが、相手が気絶するくらいの威力で殴ったのに、翔は小さな痣になっただけで口の中を切ったり、歯をおったりはしていなかった。

さらに、それでも翔は起きなかった。

四発目で目覚めた翔は少し大きくなった痣があるだけだった。

質の悪い事に五分後には痣が消え始めたとゆう珍奇劇。

朝食は簡単に食パンと紅茶、なんとなくバランスが悪いが、熱々の紅茶を翔に無理矢理呑ませたがまったく堪えず、ズルズル啜り続け、挙句の果てにおかわりを所望してくれた。

どうやらこのヴァカには打撃、熱湯は意味が無いらしい。

それでも癪だったから校内までの十分間あくびの回数殴ってやった。

結果は戦いに勝って勝負に負けた所。

「それより、この間の戦いすごかったっすね。あれ何の魔剣なんすか？あと写真出回ってたっすよ。」

「適当に創ったやつなんだけど、それより写真って？」

「そうっす。見ますか、写真？」

懐に忍ばせていたのは一枚の写真。写っていたのは

「誰、コイツ？」

見た事ない女が写っていた。

ショートのうっすら茶髪、目が切れ長の女がゲーセンのパンチングマシンの前で青筋を浮かべていた。

「あっ、間違ったっす。その子は幾月って子っすね。美鶴っちと一緒の日に謹慎になった二年生っす。なんでも頭にきて素手でパンチングマシン壊したそうっす。」

少し怖そうな顔の少女は見た目の通り危険な少女だった。

「で、それはいいとしてちょっと気になったんだけどさ、龍虎の『っす』って何で変わってるの？」

「うっ、痛いとこつくっすね？この間オタクっぽいって言われたんっす。・・・これってオタクの皆さんに失礼っす。」

「・・・ソレはさておき」

「美鶴っちってたまにひどいっすね。」

スルーするに越した事はない。

「私の写真は？」

「コレっす。」

懐から出された写真は私が写っていた。丁度破壊剣を構えた所だった。

「ふ～ん。なかなかよく取れてるじゃない。」

お世辞でもなく普通に旨く撮れていた。

「あっ、ちなみにそれたかかったんっすよ、一枚２０００円ですよ？ぼったくりっす！！」

それなら買わなければいいのに・・・。

「あ～、そのしゃしんね～、いくつか種類があってね？ほとんど良子先生が～、買い込んだらしいよ？」

教室内で立ったまま眠っていたような翔がいきなりしゃべり出したから驚いた。

「・・・あのレズ教師はしょうがないっすね。」

「7，６０００円は高かったわよ？」

「にゃあっ！？」

教室内で話していた私たちの後ろには先生が立っていた。

「相馬さん？後で生徒指導室まで来なさいね？」

笑顔で言っているのに笑顔に見えない。

「い、いえっさー！・・・っす。」

龍虎よ、冷や汗があふれ出るほどの危険を感じたか。

「そこで知らん顔してる美人さん、・・・蒼乃条さんもよ？」

「えっ！？」

「来なかったら私が職を失う事やるわよ？」

「イエス・・・マイロード。」

コワイ。そのほほえみが怖すぎる。ちゃんと行きますから許してください、毒牙にカカリタクナイデス。

「はい！それじゃあホームルーム始めるわよ～？」

朝のホームルームを終え、授業を行う教室を移動した、と言っても校内の移動、今の私なら遭難する事は簡単だった。

何せ校内を歩くのはコレで2回目、正確には三回だが、それでも校内を迷うのは簡単だった。

何せここは日本に1つしかない魔術学校。世の中には知られていないがこの世界に魔術師なんて掃いて捨てるくらいいるそうだ、その魔術師が集まる学校は物凄い広さである。

一年の校舎の三階に位置するクラスから歩いて１０分ほどの所にその教室はあった。

思ったのが、忘れ物したら非道い目に遭うな。なんて微妙な事だった。

その教室は書庫とかかれた札のある教室だったが、中には書物の一冊所か机しか置いていなかった。

「・・・」

「あら、どうしたの？・・・あっ、もしかして『この先生教室間違ってんじゃねーの？』なんて考えてる？ふふふっ、とりあえず中に入って適当な席に座ってください。説明しますから。」

中に入ってもやっぱり変わらずタダの教室だった。

「席に着いたわね？いい？この教室は書庫とは名ばかりの教室、じゃなくてちゃんとした書庫です。皆さんの机に大きなへこみが有りますね？そこから一冊本を取り出してください。」

へコみには確かに本が入っていた。

正直なんとなく使い方は分かってしまった。

要はこの本はカタログみたいな物で選んだタイトルがへコみから現れるとゆうやつでわないだろうか？

「今日はこの魔具を使ってレポートを作ってもらいます。内容は魔術の基礎についてです。基礎ができている人もそうじゃない人もここでしっかり基礎を学んでください。時間は二時間、それじゃはじめてくださ～い！」

と言うか良子先生よ、説明忘れてるよ。

「あっ、秋山君はやらなくていいからね？」

そう言われた翔に視線は集まった。

「・・・はい。」

てか、やっぱり説明の事は忘れてるんだ。話が終わったとたん他のみんなほとんどが説明を聞きに行く羽目になった。

取り敢えずレポート用紙を貰い、カタログを眺める。魔具と言うからには魔力供給口が有るはずである。

簡単な事に表紙にソレはあった。

目次で”魔術の基本”やら”初心者の魔術”、”はじめての魔術”、決まりは当然”猿にも解る魔術”。人間だって霊長類なんだけどね。

後は魔力を流しながら目次をなぞればいい。ただ、一人一冊しか借りられないそうだ。

自己練しかしていなっかった私はこの時間に学ぶ事も多かった。

魔術において、何故想像魔術を使うのか、魔装が使えればその物体が有れば想像魔術で作る必要はない。では何故想像魔術で物を創り出すのか？

それは物質のキャパシティーを広げる為。魔術師に作られた剣と、魔術師ではない人間に作られた剣は元々が違う。魔術師は魔術で剣を作り上げる。もう片方は物質である鉱石から叩き上げ、剣を作り上げる。これにより剣に代わりはないが中身が異なる。鉱石から作る場合剣のキャパシティーは鉱石の分しかない。しかし魔術で作り上げられた剣は創った魔術師の能力によって変わる。

物にあるキャパシティーはその物にある概念に使用され、たいていは少しだけキャパシティーが余る。

魔術師はその残った容量に魔装、呪い、概念変更を入れる。

しかし、容量に入りきらない魔術はその効果が半減したり、副作用が起きたり、魔術が消えたり、または器である物自体が破損、破壊に至ることもある。

その事からその物体の限界を超えるような概念なんかは使えない事がわかる。

私も一度だけやった事がある。矢の概念を〝切る〟から〝貫く〟に変えた所、矢は霧散してしまった。矢は弓でいって物などに接触した場合表面を切り裂いて進む、それが〝貫く〟とゆう事、しかし〝貫く〟だけでは前提である表面を切り裂く事が出来ないため〝貫く〟は効果を表さない。つまり結果だけでは概念的に受け付けない。

また魔術はその想像した概念が朦朧(もうろう)としたものでは効果を発揮できない。絶対とか最強、必ず等は効果を発揮しない。　このあたりが魔術の基本だそうだ。

最後に魔術には、正確には魔術師のもつ魔術源炉には属性がある。それは自分にとって一番得意とする物になり、相性によっては精製出来る物が限られたりする。

属性には、基本になる五大元素、火、水、風、土、木がある、さらに四大元素である機、霊、光、闇。機にいたってはさらに武器などに系統が別れ、武器である剣、槍、鎚、鎌、斧、銃など、加えてこの中のどれにも属さないものがいくつかある。

自宅で父さんに習った魔術はあくまで使い方で、基本に至っては全く教わらなかった。

と言うか何か父さん的に『昔からてきとーにやってたから解んない。』と、シッカリした父さんに珍しい事があった。

一時間半立った時にはレポートは完成し、龍虎達と雑談していた。

「そういえば翔は何でやらなくてよかったんすかね？」

あ～、なんてうなって困った顔をして、

「僕は・・・美鶴達を信頼して言うけど、使えないんだ。」

一瞬だけ辛そうにゆがめた顔に何か心にきた。

「鉛筆が？」

「・・・うん。って違うよ！！」

そんな事があるんだろうか？それとも訳あり……とゆうかそれしかない。
だって……

「異端者の館にいるくらいだしね。」

「いやっ！！違うんだけど！」

「解ってるわよ。・・・魔術でしょ？」

「そうだよ。たちの悪い事言わないでよ。」

「それなら何でここに入学したんだ？」

「美鶴がいたから。」

・・・取り敢えず顔面一発。

「ごめんなさい嘘です、訳ありでこの学校の校長が僕の親なんだ。で、僕自身訳ありでここに入学したんだ。」

「・・・コレが秋山クオリティっすね。」

「まあ、どうでもいいんじゃない。・・・いいじゃない親の臑齧り（すねかじ）」

「うう、違うけど信じてもらえそうにないこの雰囲気は何！？」

時々大胆になるコイツはいったい……。

新たな謎と秘密を知った。あんがいどうでもいい事だけど。

無事に課題を提出し、また教室の戻った。

ながすぎでしょう、この廊下・・・。

教室では明日の行事の説明を受け、午前中に授業は終わった。

「では皆さんは学生課に移動して、課題一つ受けて下さい。これで今日の授業は終わりです。相馬さん号令を。」

姿勢を正して黙って話を聞いていた龍虎の横顔はクールでとても綺麗で女の私でも惚れそうだった。

「了解っす。」

その一言でクールな横顔は崩れ、ニヘラと笑い顔で挨拶をした。

「相馬さんと蒼乃条さんは私に付いてきなさい。」

ほ、本当に呼ぶんだ!?ヤバイ・・・毒牙が!!

先生が私を見つめていた……。

「蒼乃条さん?何窓から逃げようとしてるの?」

ビクッ！！！

「毒牙は嫌っ！！！こ、来ないで！！」

何でだろう？こんなにも取り乱すなんて。

心の中はこんなにも落ち着いているのに。

「来たらこのバッグと一緒に死ぬ！！イヤァー！！」

「あらぁ？なに？ホントに私が職を失うような事したいの？」

「ふぇ？ち、違うの？」

すでに半泣きしていた。本当にコワイ、と言うか何でこんなにも怖かったのだろう。

「うふふっ。半泣き顔。かわいいわよ？」

ビクッ！！

「そう思うわよね？秋山君？」

「・・・。」

そんなににっこり顔でみるな～！！

「屈辱です！！先生！！」

「何？」

「卒業式の日、体育館の裏で釘バットと共に待っています！」

「新しいプロポーズ？」

このネタはいいのか？

さっきの動揺は良子先生の細やかな苛めで、魔眼の一種で恐意（テリブル）だそうだ。

「さて、それじゃ、まず蒼乃条さんにはコレ。」

手渡されたのはプラスチックらしき物でできたカード。

「いい？そのカードは重要な物よ。無くさないでね？それには貴女のランク、ポイント、あだ名なんかが記録されるから。」

カードには私の顔写真がつき、左上にＲＡＮＫ１、右上に０、０の下に１０００とかかれ、右下には２０００と書かれていた。

「そのカードはこの学園ではかなり重要です、いいですか？まず左上のＲＡＮＫですがまだまだ始まったばかりのヒヨッコとゆう事で１です。これは右上のポイントが下に書いてあるポイント、このカードなら１０００ポイント貯める事でランクアップの試験を受ける事ができます。右下の２０００は学園内共通の通貨です。課題の報酬などで増やしてください。ん～、こんなもんかな？……あ、後顔写真の下に通り名が出てるでしょ？それは皆から見た貴女のイメージだから。」

要はこの学園に置いての学生証と財布と通知表をかねているそうだ。

通り名が眼帯（ベルト）女ってどうゆう事でしょう？

「それから、この学園は授業が少ない変わり、課題があります。学生課で自分が受ける課題を決め、それをこなし、初めて成績が上がります。当然課題をやらなければサボりと見なされますし、学園での食事から何までの生活に困りますからしっかりこなしてください。それじゃあ廊下で待っててください。」

廊下でまてとは……。

『相馬さん？』

『は、はい？なんすか？』

『相談なんだけど……、写真交換してくれない？』

『えっ？嫌っすよ。これ手に入れるの大変だったんすから』

『そう……。なら、これでも？』

『こ、これって……。』

『そうよ。貴女が探してるんじゃないかと思ってね？』

『……いいんすか？これたぶん私の写真より価値があるっすよ』

『いいの。複製がもう一つあるから……この世に二枚しかないの

よ？』

『じゃあ、どうぞ。』

中では私の写真を交換している様だ。レアな写真なのだろうか、とゆうかやめていただきたい。

「お待たせ。」

ニッコリ笑顔が二人出て来た。二人共ほしいものが手に入り満足なのだろう……私的には龍虎との付き合い方を考えさせる事だが。

龍虎はレズなのか……

「じゃあ学生課に行くわよ？」

校舎を出て裏門に向かうと裏門の横にまたもやばかでかい建物があった。それは校舎と呼ぶには学び舎らしくないレンガ造りの建物だった。

中に入ると学園の生徒が溢れ返っていた。中は異端者の館と違い普通に洋館をイメージさせられた。正面には受付らしきカウンターがあり、それを挟むように階段があり、入口の左右にはまたもカウ

ンターが設置されていた。

「じゃあ説明するわね？ここでは課題と言う名のクエストを受けてもらいます。クエストは自分で選んでもらえますが一年生の間は先生の許可が無い限りＲＡＮＫ１０以上の生徒の同伴が必要なので気をつけてください。クエストは二階の掲示板に貼り付けてあるのを見て選んで、気に入ったのを受けてください。っと説明はこれぐらいかな？」

長々と一気に語られました……この人絶対他人の迷惑考えない人だ、しかも重要な所が抜けてるし。

「ＲＡＮＫ１０の生徒ってどうやって探すんですか？」

「そういえば言い忘れてたわ、掲示板の隣りに載ってるリストから選ぶの。まぁ、後は相馬さんに聞いて、それじゃ」

……逃げて行った。

「それじゃあちゃっちゃと課題終わらせるっすよ。」

二階に向かって歩き出す龍虎の後に付いて行った。

この時なんとなく嫌な予感はしていたけど、それが本当に当るとは考えてはいなかった。

第五話　魔術の基礎（後書き）

中途半端な終わりになりましたがこれはこうゆう物だとおもってください。更新の遅い私ですが長い付き合いでお願いします。

第六話　きっと……また会える事を……願う（前編）

二階に向かって歩き出した龍虎は何故かウキウキした後ろ姿で階段を登っていった。

二階の壁には掲示板が置いてあり、紙がところ狭しと張られていた。紙にはそれぞれ〝クエスト名〟〝受ける人数〟〝内容〟〝報酬〟が書かれている。

これなんのＲＰＧ？

「ねえ龍虎？これってモン○ン？」

「うっは！ま、まずいっすよ、ネタは！もう三回目っすよ！？」

「いや、だってさ討伐クエスト見るとさグラビ○スとかモノブ○スとかに見えるんだけど？」

「ダメっす！もうなにも言っちゃダメっす！早くクエスト選んで行くっすよ！」

そんなに汗だくになるほどあぶない事言った？

「それはさておきどのクエスト受けるのさ？」

課題を自分で決めるのはやる気をそがないのでいいかもしれない、この学園を創った人はすごいね。

「そうっすね～……」

「よし！この特〇キノコ十個採取ってのやろう！」

「だからダメって言ってるっす！！」

結局初めてなのに討伐クエストを受ける事に決めた。

同行人を加えて……

「なんでコイツなのさ？」

「コイツ呼ばわりは酷いですね？」

そこには前に敗れた未剣がいた。

「まぁ、いいじゃないっすか。知らない先輩達と組むよりは気が楽っすよ。」

そんなものだろうか？

「ってか足よこせ！忘れちゃうでしょ！？」

「クエスト行ってからでいいかい？ここだと迷惑かけると思うよ？」

まぁ確かに魔王の力を移すほどの事をやるからには何か起きるかもしれない。

「そうだな。じゃあ早く行こうか、ケルベロス退治。」

「……え！？いきなりケルベロスってヤバいっすよ！」

「大丈夫だって！資料にはＲＡＮＫ９でも倒せたって記録があったから。」

「もしかしてブルーフォグナイトって魔術師かい？」

すでに仲良しだよ的なオーラをまとった未剣はなれなれしかった。

「美鶴っち！それはブルーフォグナイトだからできたって話っす！」

誰さ、ブルーフォグナイトって、確かに資料には書いてあったけど。

「その人は別っす！彼はモン○ンでいうミラバ○カンとかミラボ○アスとかを１人で遊びながら倒すぐらいの人っす！」

あれだけ私にはダメ出ししたくせに自分は使うんだ……

「ふ～ん、僕もあまり知らなかったけど、、どんな化け物なんだかね。」

三年通っていた未剣は判ったようだ。さりげなくネタも判ったんだ……。

「本名は何なのかな？」

「なんかそのまんま日本語読みすればいいらしいっす」

青・霧・夜……まさか、ね。

「まぁなんとかなるでしょ？さっさと準備して！裏門に集合ね！」

まさか適当に選んだクエストで悲劇を招くとはこの時まったく想像していなかった。

寮まで戻り各個人で裏門に集合する事になり。

装備を揃え裏門に行くと既に二人とも待っていた。

同じ寮なのになんでやねん？

それはさておき未剣はこの間と変わらず制服の上にコートを着、手には〝無名・棒〟（この間の戦闘で使用していた杖）を持っていたが、龍虎は

「ハルペー？」

「お！良く判ったっすね！」

手には刃が丁度一人分首を切れるほどの長さしかない鎌を持っていた。リーチは未剣の無名・棒と大差ない２ｍちょいくらい。頭には魔女ハットをかぶり、丈が足首まで届くぐらいのローブに着替えていた。

要は草刈り鎌の柄が長くなっただけ。

「さて、行きますか！」

「あれ？特にコメント無しっすか？」

普通過ぎるからコメント無し！

「でも美鶴っちの装備いいっすね。あの魔剣に手甲、あとローラースケートっすよね？」

「そうだけど、私の装備なんてまだまだ、弱点だらけだし……。」

魔剣であるブレイクソードにしても、左手の手甲である〝デュラハン（今命名）〟にも決定的な弱点がある。今は無理でもいつかはもっとマシな魔具を作ってみたい。

とりあえず裏門にある窓口でクエストを登録し、準備は整った。

登録といってもタイムカードを切って行くようなものだったが。

裏門を抜け橋をわたると熱帯林のジャングルがあった。

「……ここ日本だよね？」

「そうっすよ。私も最初はびっくりしたっす、それとここからは異界のモノとか普通に出てくるんで気をつけるっす。」

なるほどね……。まさにＲＰＧの王道……エンカウント。

違うか。

「で、聞いてなかったのですが、目的のケルベロスは何処にいるんですか？」

「火山の洞窟って書いてあったけど？」

「えっ！？あそこっすか！」

なんとも嫌そうな顔をしているではないか。

「あそこはね一年生なんかが行く場所じゃないんだよ。火属性の悪魔のたまり場で属性耐性の
授業受けてないのにどうにかなるような甘い所じゃないんだよ？」

この間戦った仲なのに今ではそんな事無かったかのように接してくれる、というかただ自分の身可愛さに遠回しに反対してるだけか。

「何とかなるわよ。じゃ、早速だけど足返して。」「？　さっきも言ってたけど足ってなんすか？」

今時どうよと言いたくなる、頭に指差しう～んなんて唸っている龍虎は絵にならない。

「龍虎は知らなくていい事よ。」

「……私だけ除け者っすか。」

一瞬で潰れてしまった、

とりあえず龍虎はスルーして話を進めよう。

「じゃあまずその聖骸布を外して？」

は…？聖骸布って？

「もしかして……知らない……とか？」

その通り。

「…その顔を見るとそうみたいだね。」

そんなに表情に出てるかな？

「いいかい？聖骸布というのは君が頭に巻いてるベルトの本来の名前で、キリスト教の指導者、キリストが死んだ後にその身を巻いた布の事を言うんだ。」

……はいっ？キリストを包んでた布？それって世界遺産レベル

の物じゃ……、

「本物かどうかは知らないけど魔力殺しの魔具は大抵聖骸布と呼ばれるから。」

なるほどね……。

「じゃあ外しますか。」

……？

……！！

……！！！

「外れない場合どうすれば？」

「え、外れないんですか？」

そんな〝えっ！？〟みたいな顔されてもマジで取れないんですけ

ど……。

「そんな事ある訳ないっすよ。」

カチャカチャ、カチャ、シュル……

それはそれは普通に巻いたベルトのように簡単に外せた。

「なんで外れんのさ！！！」

「ええっ！？そこでキレられても　ってギャーーっす！！」

叫ぶと同時にボテッとあっさり尻餅を付いた龍虎、後ろに悪魔でもいたのだろうか？

しかし振り返っても悪魔なんていない、それ以前に回りに生物の気配すら無い。

「これは……話に聞いていたより……酷いと言うかなんと言うか。」

はっ？

もしかして……。

「目の回りにベルトの後……ついてる？」

「美鶴っちにしては洒落っ気のある方に話を進めたっすけどまったくの問題外っす！」

酷い……この数日で既に洒落っ気の無い女と思われていたとは……。

「それはどうでもいいっす！」

どうでもいいなら普通に話進めろ！

「美鶴さん、かなり進行してますね。鏡見ます？」

……いつの間にこんなどっかの魔女ルックになったのだろうか……。

右眼の回りには黒い痣が広がっていた。

その痣は脈動し、体を浸食していこうとする。

痣は茨が広がるようになっていたが目の下は違い、剣を模した痣が一つあった。

「ってか眼の色がありえないくらい赤いんですが……。」

まるでパソコン疲れで目の血管が切れた人みたいな感じになっているではないか。

「まぁ、魔眼の持ち主の本来の眼色なんだろう。」

「で、外したのはいいけどさ、ぶっちゃけ今ヤバい状態なんですが……。魔力垂れ流しで、この辺のマナを遥かに凌駕しちゃってたりするわけですが……、」

マナとは人間以外の生物が生み出す魔力でそこら中に満ちているが、実際魔術師には少ししか関係無い。

マナを使うのは想像魔術によって創造される、つまり外界に触れる瞬間だけ創られた物質により消費される、または疑似的に作られる疑似魔術回路（イミティーションライン）の精製にも使われる。

「早めに終わらせたほうがいいっす、悪魔やら下級神族なんかがこっちに向かってるっす！」

「じゃあ、まず僕の足、太股に剣の印があるから、それを魔力を流しこんで無理矢理抜き取るんだ。」

要は力づくでやれと……。

般妁により破られた制服の右太股には目の下にある剣の印があり、触れると確かに脚があるのが分かった。

左手を添え、垂れ流し状態の魔力を更に流し込む。

バチバチと電気が跳ねるような音が重なり、剣の印から定規で引いたような線が広がり始める。

それはあみだくじのようにひろがり、

やがてその線も右脚全体を包み込む

……と

「ぐっ！吸収するのか！！」

右眼の茨の痣が一気に左手まで浸食し、右脚の痣を吸収していく。

特に痛みや恐怖はなく、吸収の反動が少しと、安堵があった。

まだ少ししかたっていないが右脚を回収できただけでも大きな進展だった。

やがて吸収も終わり浸食も聖骸布に封印されているサイズまで収まった。

般妁の脚にはもう剣の印は無く、無事に回収出来たようだ

「終わったっすか？」

「うん。無事に終わっ……なんでこんな事に……」

ベルトを巻き直すと垂れ流しになっていた魔力は完全に止まり、みなれた顔に戻っていた。

が、

変わりに右眼の下には剣の印が2本あった。

これで少しみためが変わっただけなら魔王殺ーす。

「美鶴っち！悪魔が来たっす！」

龍虎がいる方に振り向くと確かに何かいた。

「ゾンビってかワイ〇？奥にいるのはワイ〇キング？」

「んなわけあるかっす！」

素早いツッコミありがとう。

地中からわらわらと白骨体が溢れ出て来る。

その奥には二回り程大きい奴がいて、何故かある呪文を唱えていた。

「メェ～てェオぅ～にパわーヲぉ～」

「ネター！？ねえ龍虎！あいつらネタ使ってるって！！」

「あれってネタっすか？私には分からないっすね。」

……龍虎を超えてしまった。

「落ち込んでる場合じゃないよ？」

確かに未剣の言う通りだった、下級魔道人形（ティミッドゴーレム）（みためはワイ○）はその数を増やし続けていた。

奥にいる2体（ワイ○キング）は多分片方が下級魔道人形（ティミッドゴーレム）の作製、片方が操っているのだろう。

このタイプの敵は人形師（パペットマスター）と呼ばれ、得意な点から苦手な点まで分かっている。

人形師（パペットマスター）は下級魔道人形（ティミッドゴーレム）の数で押すか、高位魔道人形（ハイゴーレム）で戦うかがほとんどで、人形師（パペットマスター）は戦闘に関わりがない。

つまり人形師（パペットマスター）にとって魔道人形（ゴーレム）が負ければそれは人形師（パペットマスター）の敗北に繋がる。

ただ、魔道人形（ゴーレム）にもタイプがある。

ここにいるのは下級魔道人形（ティミッドゴーレム）の分類の龍牙兵（スパルトイ）であろう、操作にいたっては自律型では無く、疑似魔力回路によって動いているはずだ。

こいつらを倒すには頭部破壊か疑似魔力回路（イミティーションライン）の切断しかない。

「龍虎！霊視（ソウルリード）出来ない？」

「出来ないっす！」

「僕も無理だね。」

ほぼ即答された。

ただこれで疑似魔力回路（イミティーションライン）の切断は不可能ななり、頭部破壊のみになった。

問題は私にあったが……、まあやってみなければ分からないのも事実。

すでに周囲を囲まれ、退路は絶たれていた。

「未剣は弱点判る？」

「大丈夫です。」

三年生は頼りになる。

未剣じゃなければもっと信頼出来るのに……。

「龍虎、相手は頭が弱点だから頭壊せ。以上」

「説明どうもっす。」

さあ、殺りますか！

ブレイクソードを抜き放ち、魔力を流し込む。

「龍虎達はそっちの相手して、こっちの相手は私がや……、」

問題発生、予想通りでもあったが、

「どうしたっすか！」

「最悪の形で想像が現実になったと言っておこう。」

龍牙兵（スパルトイ）に向かってもう一度振り下ろすが、

スカッ

と剣が通り抜けた。

戦いにならないよ、じいちゃん。

「……はい？それは冗談とかっすよね？」

紛れも無い真実ですね。

「蒼乃条さん？この状況、どうやって切り抜けます？」

どうやるもなにも……

「撤収しかないでしょ！？」

「では私のイミティーボルグで隙間を作りますからそこから逃げま」

「私がやるっす！広範囲攻撃に関しては自信ありっすね。」

「よし、任せた！」

「決断はやっ！」

「どうせあんたら二人がどうにかするしかないんだからなんでもいいの。」

「そうっすね。じゃあやるっすよ！」

鎌を掲げ、

「カルディナスハルペー高出力！ｍｏｄｅ　ＤＥＡＴＨ・ＳＩＺＥ！」

刃が分裂、展開し、重なりあって５ｍほどの大きな刃を創った。

「かますよ！！骸骨車（がいこつしゃ）！！」

大きく振りかぶり投げ放った鎌は回転しながら龍牙兵（スパルトイ）をなぎ倒して進み、一瞬にして逃げ道を作り上げた。

「ねぇ、龍虎？」

「逃げるっすよ！！」

「技名とか叫ばなくてもよくない？」

「ロマンと解釈してくださいっす。」

さっさとその場から逃げ出した私達は危険度の低い学園の近くまで急いだ。

学園には当然疑似魔力回路（イミティーションライン）で組み上げられた魔術結界（シールド）が張られている。

疑似魔力回路（イミティーションライン）で創る魔術結界（シールド）とは魔女がよく使う魔方陣（ルーン）と同じで、各個人で疑似魔力回路（イミティーションライン）を精製し、魔方陣（ルーン）を作り上げ、魔力増幅から簡易魔術の発生などを行い、魔術結界を創る。

簡単に略すと疑似魔力回路（イミティーションライン）が魔章紋の変わりを果たす事になる。

大抵は魔力で疑似魔力回路（イミティーションライン）を造り、疑似魔力回路（イミティーションライン）で行う魔方陣（ルーン）を造りあげ、魔方陣（ルーン）は魔術を生み、魔術精製にマナを使う。

当然魔方陣を使ったほうが断然魔力量が高く、威力にも差がでる。

簡単に数値化するとしたのような感じになる。

魔力　マナ　魔術

１００＋５０＝１５０

魔力　マナ　ルーン　魔術

１００＋５０＋２００＝３５０

魔方陣を使う魔術は基本的に呪いの部類であり、半永久的に続くが逆に弱点もあり、疑似魔力回路（イミティーションライン）で造られた魔方陣（ルーン）を壊されると魔術は消滅する。

当然魔力を流し込んでいない状態では発動はしない、学園の魔術（シー）結界（ルド）は私の魔眼と同じような魔力源炉、創られた魔力源炉、何かの異人類の魔力源炉、マナの吸収により発動している。

こんな所が私の知る限りの魔方陣（ルーン）の知識なのだがイマイチ分かりきってない。

「で、どうしましょう？」

とりあえずどうにもならないので声をかけてみたが、

「み…美鶴っち！元気っすね～！！わ……私はぐったりっすよ！なんせ私の魔力空っぽなんすから。」

龍虎は骸骨車で精一杯のご様子、

「今日はもう無理なんじゃないかな？明日に持ち越して課題こなすしか無いと思うよ？」

普通に元気、と言うか特に何もしてない未剣が当然のごとく分かりきった事を言っている。

「そうね。明日までに杖（まぐ）はどうにかしとくわ。」

初めての課題は完敗に終わった。

それ以前に戦いにすらなっていなかったのも真実であり……

今まで感じた事ないくらい頭に来ていたのも真実であった。

寮に戻ったのは４時３０分頃で既に翔は戻っていた。

夕食を翔に任せ（特に言わなくても用意してありそうだが）、すぐに杖の作成にかかった。

まずは資料から情報を集める。

ブレイクソードを創った時には特に情報を集めたりしなかったせいでイマイチ使いどころの悪い杖（まぐ）になってしまったが、それを防ぐ為に今回は情報から入った。

想像魔術は何よりも知識が物を言う魔術であり、知識があればある程強さを増すと言っても過言ではない。

知識のない奴は知識に泣くのだ！

まずは武器の種類だが、私は剣だけを使い続ける事を選んだ。

私にはいろいろな武器を使い回す才能なんてないと思うし、一番武器としてのイメージが強いからである。

武器の派生は剣から始まったと言っても過言ではない。

日本において武器の始まりは黒曜石を木の棒に巻き付けたナイフが始まりである。

まずは人外のものを相手にできる程の剣が必要だ。

相手は基本的に悪魔などの邪神の部類である事から聖剣と呼ばれる剣が好ましい。

聖剣で有名なのはエクスカリバーであるが、私達には宝のもちぐされであろう。

元々魔術師ではないこの体は当然、魔術回路(ライン)も魔眼の副産物であり、体に完璧に馴染まない。

結果、あまりにも巨大な魔力を使う魔術を完成させた場合、魔術回路(イン)は使えなくなる可能性がある。

原理は壊れたパイプ、焼き切れた回線と同じ。

精製するには大量の魔力と性格な情報(せっけいず)があれば誰でも造れる、しかし使用する魔力量がとんでもない量になる、伝説上有名な武器とはそんな物であり、

〝最強であるが故に最弱でもあった〟

そうなるとやはりオリジナルと伝説上の物を少しパクればいい。

そこで目をつけたのは名前は聞いた事あるけどどんな物か知らな

い剣。

〝聖剣デュランダル〟

別名でドゥリンダナ、デュランダーナ。

剣の柄に聖遺物が仕込まれていた英雄ローランの武器。

聖遺物は聖ピエールの歯、聖バジルの血、聖デュニルの毛髪、聖母マリアの服などで、何かの戦いか何かで相手に剣を取られないように石にぶつけておろうと（刃こぼれさせようとしたとも言われ）した所、逆に石が切れてしまい剣が折れる事は無かったと言う。

デュランダルと同じ製法で作られたとされる剣があり、クルタナとジュクユーズと言う。

記録についてはあまり調べていなかったが、クルタナには切っ先

が無かったという。

正直剣を作る為の情報としては足りないのだが、只でさえ神想（こうそくまじゅつ）は使えなくて時間がかかる。

精製にどれだけ時間がかかるか分からないので半分ぐらいはオリジナルとする事にした。

聖なる剣である事は対になる悪があり、悪がなければ聖はない。

聖は悪を退けるものであり、聖は悪に屈せず。

その剣は悪魔を切る為に存在し、それ以外に存在する意味は無い。

刀身は西洋の両刃剣を想像させ、岩であろうとも切り捨ててしまう。

柄は聖ピエールの歯を削りとった装飾が付き、聖母マリアの服に聖バジルの血を染み込ませ、聖デュニルの毛髪を編み込んだ布を巻き付ける。

バランスの取れた両刃剣は刀身から柄に至るまで聖を宿し、悪を寄せ付けぬ力を手にする。

……これが……

〝デュランダル〟

何度も頭の中で情報を元に剣を想像し、作り上げた剣が目の前にある。

当然本来のデュランダルとはかけ離れているかもしれない。

実際私が使ったのは名前と柄の聖遺物、伝説の一片だけで、もっとちゃんとした伝説があったのかもしれない。

刀身も両刃では無く片刃かも知れないし、西洋のバスタードソードみたいなのではなく、ナイフみたいな剣かも知れない、掴も聖遺物を柄の中が空洞で入っていただけかも知れない。

それでも、私にとってこの剣こそがデュランダルである事に代わりはない。

時計をみると9時を少し過ぎていたくらいだった。

それと同時に左腕と頭に痛みが走った。

熱が籠り、体温が上がる。

仕方の無い事だ、本来私の体は魔術師じゃ無いのだ、魔術回路（ライン）は大量の魔力で焼け、頭は魔術に適応しきれていないからだ。

ふらつく頭をたたき、居間に向かう。　気のせいだろうか……？

前回よりも痛みが少なく……

スムーズに物事が進んだ。

これは経験なのだろうか？

……

体の熱も冷めずに食事が喉を通りにくい。

「あんまり無理しちゃ駄目だよ？」

正面に座る翔が心配そうに聞くがそれほど無理はしてない。

「大丈夫。今日は龍虎達に迷惑かけちゃったから、明日はそんな事

がないようにさ。」

初日から課題クリア出来ずに、癪だっただけなのだが。

「明日は僕もついて行くよ」

なんて心強いのかどうなのか微妙な事を言い出した。

「却下。」

即座に返答しましたが、

「ひどっ！即答かよ。」

理由なんて一つしかないじゃん。

「魔術使えない馬鹿連れてってどうすんのさ。」

「いや、これでも1人で課題クリアしてるんだよ？」

「？　どうやって？」

「伝家の宝刀、魔具があれば出来るよ。」

……はぁ～～～

「ふんっ！！」

ガッ！！と音がなるほどの力で後頭部を強打したが、音がなっただけで、大した痛みはなさそうだった、むしろ私の拳のが痛かった。

私の本気の拳すら聞かない石頭……もとい、頑丈さ、何なんだこいつは？

「いきなり何すんの？」

いかにも不服だと言わんばかりに睨みつける翔に

「魔術使えねーのに杖持ってたってしょ～がねーだろうが！！魔力が通らねーとどんな魔具だってそこらの武器と代わんないの！！」

少しばかり感情的になってしまった。

「魔力なら通ってるよ、魔具に魔力源炉が付いてるんだ。」

……

……

……

「……え～～～～と……とりあえず。」

〝言うのが遅い！！！〟

「じゃあ今まで普通にやってきたんだ……なんだ、心配する事なかったじゃん。」

あははと笑い誤魔化す事にした。

「美鶴は心配したんじゃなくて足手まといになると思っただけでしょ？」

「……ああ。」

違う、本当に……心配したのさ。

「じゃあ明日にそなえて早く寝ようか。……おやすみ、翔」

ベットに入るとまどろみはすぐにやって来た。

魔術を使うなら必ず血に塗れる事になる、これは必然であり運命であり、絶対の未来である。

何事にも絶対は存在しないと言うが、今現在においてその言葉は存在しない。

魔術における概念的な絶対は無いが、結果における絶対はある。

人が死んだら蘇らない。普通はそうだが、魔法においてそれは違う。

方法は様々だが

死霊秘法(ネクロノミコン)、キリストの奇跡、死体憑依(デッドボディコンフュ)、肉体転生(ボディトランス)、錬金術(アルケミィ)など。

やれない事はない、しかしそれらは禁忌とされているのは何故か？普通なら死人が生き返れば嬉しい。

方法が難しいとゆう事もあるしリスクもとても大きいが、一番の理由は〝世界の歪み〟。

魔術は少しだけ世界の理をねじ曲げ、発動する。

その際に生まれる歪みはどこかで集まり、絶対に世界に影響を及ぼす事になる。

死んだ人間はこの世の理から外れ、天国なり地獄なり煉獄なり三

途の川なり異界なりに行く、その魂をもう一度この世に戻せば人1人でも大きな歪みが出来る。

これは絶対である。

絶対、必然、運命、宿命、天命、必ず、確実、これは必ずある。

何事においても、例え魔術や魔法を使っても必ず絶対に起こる何かはある。

世界の理を知り、

己の知識を知り、

知識で学を知り、

全てで何もかもをしる。

知を得、学をこなし、魔を成し、世に関与する、それこそが魔術師が目指す目標であり、魔法使いの姿である。

要は必然はあり、変えられない事は多くある。世界も魔術で変化していく。

『世界と魔術の関係および魔術師の目標』

言いたい事は判るがそれだけに理解が甘い。

授業は一年生らしく基本的な所を学んでいる。

魔術はその危険性から決まり事はかなり厳しく、有名な魔術師がちょっとした事で魔術協会で拘束、懲役何年。また実刑に合う事も度々あるそうだ。

そんな事を守る為、魔術の高みを目指す為に学び、魔術の糧へと成していく。

授業は黙々と進み、話が次々と移り変わっていく。

話を聞き流していると授業の終わりがきた。

校内に鐘の音が鳴り響く、

学生にとっての憩の時間が始まる。

「龍虎〜！昼どうする？」

「そうっすね〜？商店街の定職屋にでも行くっすか？」

「いや漢字違うから、」

「嫌っすね〜。雅（みやび）なじょ〜だんっすよ！」

「そんな龍虎が嫌いになりました。」

「が〜ん！！」

「が〜ん！！とか口で言うなっ！！」

「見てて飽きないな、美鶴達は」

いつからいたのか翔が後ろに立っていた。

「おっ、秋山君。一緒にお昼どうっすか？」

「ぜひともイカせてもらいます。」

「カタカナやめろ！！」

ギャアギャアわめきながら商店街に向かって歩く蒼乃条達をそっと見つめる目があった、そしてポツリと

「かわってないね、美鶴は」

と誰にも聞こえない声で呟いた。

「いつまでも変わらないものはないけどね。」

今日合うのはやめておこう、意味なんてないけどね♪

明日には……

きっと……。

第六話　きっと……また会える事を……願う（前編）（後書き）

長くかかりました、よく判らない行事が連続し、体力不足でダウンしてました。
それでも何とか書き上げる事が出来ました。
できる限り早く次の話を上げていきたいので読んでくださる皆様、これからもよろしくお願いします。

第七話　きっと……また会える事を……願う（中編）

もう一度……

もう一度……

もう一度……

貴女にあいたかった。

それだけだ、そのために僕は存在している。

今の僕はそれ以外存在する意味がない。

体は鉄、血潮は魔、構成するは魔道の塊、体は鉄で冷えきるも精神は熱き塊で出来ていると信じる。

そんな体ですまないと思うが、最愛の……僕に生きる意味を見出ださせてくれた掛け替えのない人。

許されない禁忌を犯す。

きっと許されないだろう。

実刑も覚悟の上だ。

それでも……。

姉は僕なんかより長生きするべきだったんだ。

もう少しだ……。

待っててください。

姉さん……。

〝あなたはなぜ道の前に悪があるのに見て見ぬ振りをするのですか？〟

定食屋は商店街の通りのほぼ真ん中にある人気店〝ｃｈｅ・りー〟、正直店名は理解出来ないが、ここのお姉さんがつくる料理が絶品と評判である。

ガラガラと開ける引戸を開けるといらっしゃいませと気持ち良く受け入れられた。

「やっぱり昼時は混んでるな。」

八つあるテーブルは埋まり、カウンターも全て埋まっていた。

しかし、ここで帰るのも何だか負けた気がする。

「貴女、蒼乃条さんよね？」

振り返ると私より少し背の高い女がいた、私が１７１ｃｍくらいだから１７４、５はあるんじゃないだろうか。

「美鶴っちの知り合いっすか？」

「いや？確かに私が蒼乃条ですが？」

一瞬で目が爛々と輝いた。

「私貴女のファンなんです！握手してください！」

いつ私はどっかのアイドルになったのだろうか……。

「美鶴っちアイドルみたいっすね？」

「うるさいイ〇ベル。」

「アイドルでそんなネタ出しちゃダメっす！！！」

「何なんだ？この三角形は？」

美鶴と相馬のノリツッコミをほんわかした表情でお姉さんが眺めていた。

「美鶴、漫才もそこまでにして握手してあげなよ、回りの視線も痛いし。」

翔に言われて回りを見ると確かに回りの視線が痛かった。

「てか少しキモイ。」

お姉さんが目をほんわかニッコリしながらよだれを垂らしている。

「もしも～し……返事がない、ただの」
「変態のようだ。っすね」
「……。」
ＫＩＬＬ　ＹＯＵ．
知らしめてやる。
「痛っ、痛たた！や、止めるっす！！デコが陥没するっす！！！」
「鶴デコピーン鶴デコピーン鶴デコピーン鶴デコピーン鶴デコピーン鶴デコピーン鶴デ……ｅｔｃ．ｅｔｃ」
人の台詞をとる奴に脳などいらん！
「そ、そうゆうネタは１８こ、ギャーーー！！」
「はぁ、すみません。騒がしくしてしまって、あいてる席でいいですか？」
いつの間にかもう一人エプロンをつけた女性に翔がいった。
もちろんデコピンは速度を上げる。
「いえいえ、騒がしいのはいつもですから。どうぞ席についてください。姉さんもいつまでもほんわかしてないでキッチンに戻って！」

「……はっ、……そうだった。」

渋々とキッチンに帰って行く。

こちらも渋々と翔がいる席に座る。

「ご注文を繰り返します。馬の刺身に剛龍のステーキ、紅虎の叩き、朱の参番でよろしいですか？」

「はいっす。」

「龍虎は気付かないようだ。」

「そうだな。」

「？」

「気付かない方が幸せな事もある。」

そしてここでも戦いが始まる。

私が頼んだ朱の参番。

実は早食いメニューで、朱の壱、弐、参とあって参が一番量が多く、食べきればただ＋賞金までもらえてしまうとなかなかいいメニューだ。

「すいません、相席でよろしいですか？」

エプロン姿の、多分ここのお姉さんの妹と思われる人が二人の客を連れてきた。

別に断る必要も無い。

「ええ、どうぞ。……龍虎邪魔。」

脚をグリグリと踏み付けてみた。

「酷い！っす。確かに邪魔ですが！」

あいた席に多分きょうだいであろう二人が座った。

「どうもありがとうございます。ほら匣(こう)も御礼言いなさい？」

「うん。杏姉(あんず)さんともどもありがとうございます。」

丁寧に頭を下げた二人は杏と匣といい、姉である杏は金髪であり、吊り目だったりツインテールだったりロリだったりしないけど、可愛い。

私の可愛いとゆう判定の仕方を疑うばかりだった。

髪を首元で二つに縛り可愛い笑顔を浮かべる。

弟の匣(こう)は同じく金髪で丸めがねを書けていた。

見る限りどっかね少年先生に見えなくもない。

「そんなに丁寧に御礼を言われても。」

「そうっすよね？美鶴っちは私に暴力振っただけっすもんね。」

「五月蠅い、黙れ。」

「痛っ！！！」

空中を舞う爪楊枝(つまようじ)は見事に龍虎の眉間に突き刺さる。

「その痛みを快感に変えてみろ。」

「私にMになれというっすか？」

「目指すは最高のドM、アナスタシ○！」

「無理っす！！！」

「こうして至高の頂点を目指す道が始まった。」

「かってにナレーションいれるなっす！！」

「立つんだ○〝ョー！！」

「ジョー！！じゃねーー！！……っす。」

「おいおい著作権は守れよな？」

「今さらそれを言うっすか！！」

「すいません。うるさい人達で」

翔が見事に保護者面をかましていた。

「いいんですよ。うるさいのは好きですよ。」

ニッコリほほ笑む杏さんに唐突に

「僕と付き合いませんか？」

「却下しま～す♪」

言って瞬殺された。

「お前そんなキャラじゃなかったでしょうが！」

そんなやり取りをしていると料理がやってきた。

「朱の参番はどちら様ですか？」

持って来たのはさっきの姉妹ではなく、いい感じなマッチョの店長だった。（おこがましいく胸に店長と書いて、もとい縫ってあった）

「は～い、」

軽く片手を上げてふらふらとふった。

「時間は３０分。食べきればタダ、それと校内共通ポイント３００です、用意はいいですか？」

「どうぞ？」

目の前に運ばれて来たのは

……

普通の定食だった。ご飯に味噌汁、漬物に塩鮭。

これの後にカツ丼も付くらしい。

量は少し多いが誰でも食べられそうである。

隣りでは龍虎がメニューを見ながら笑い、翔は溜息をはいた。

「初めてください。」

「いただきます。」

塩鮭に橋を伸ばす、

「秋山君はなんで溜息付いたっすか？」

「あえて言うならここの店長が哀れだなと」

「？」

「早食いとかってのは食べきればタダだけど逆に食べきれないと結構な料金をとられる。」

「そうっすね？」

「だからこの店だと早食いは量じゃなくて味にある。メニューに書いてあるとおりだとしたら……」

美鶴は既に鮭を口に含み、咀嚼した後だった。

「うっ、」

「キブアップですか？」

店長が聞いたのは

「うまいな、これ。」

歓喜の声だった。

「！？」

店長も驚いた、自分でさえ食べられない料理、かつては唸りながら食べきった猛者も少なくなかったが、うまいと言いながら食べた学生は初めてだった。

この朱の壱、弐、参番は食べられる様な味はしていないのだ。

「だって美鶴は、」

ただふんだんに、無駄な量のスパイスを盛り込んだ料理、カレーならちゃんと整えられた辛い味がうまみになるが、この朱の参番は本当に辛さだけを追求した結果である。

ゆえにこれをうまいといいながら食えるやつがいるとは思いもしなかった。

「辛い物好きな上に味おんちなんだからたちが悪い。俺の料理全部に唐辛子をかけて食べるんだ、悲しくなるぜ。」

「秋山君も苦労してるんすね？」

簡単に朱の参番を平らげてしまったではないか！！

「朱の参番、完食しましたー！！」

おおーっ！！と歓声が上がった。

あまり期待していなかった人たちが好奇の目を向けた。

龍虎達もそれぞれおのおのの料理を平らげ、
「それじゃ課題こなしに行くか！」
「１７００ポイントになります。」
カウンターには姉のほうがいた。
「料理名に龍虎の名前が多かったから龍虎のおごりで。」
「なんでっすか！？」
みんなで普通に顔を見合わせ、
「「「気づかないから、」」」
「なににっすか？」
「ほら気づいてない。いいよ、じゃ先に行ってるから。」
「み、美鶴っち！ひどいっす！！横暴っす！！」
ポイントを支払い後から追っかけてくる龍虎だった。
「僕たちもおごってもらってよかったんでしょうか？」
合席していた杏と匣も一緒にでてきた。

「いいんですよ、クラスの同級生の姉におごっただけなんだから。」

「お、覚えてくれたんですか？」

失礼にも私が知らなかったみたいに言う、匣とは同じクラスで、話したことはなかったがすごいうわさが流れている。

「ひとつ聞いていい？」

匣のうわさは前からすごく気になっていたが、別にわざわざ話しかけて聞き出すような必要性もないと思っていたが、どうせだからこの機会に聞いてしまおう。

「何ですか？」

「めちゃくちゃ頭いいってほんとの話？」

「ほんとの話ですよ？」

弟の変わりに杏が答えてくれた。

何でも小学校から中学と、すべてのテストでは満点、教師からの問題もパーフェクトに答えたという。

別に頭が言い訳ではないと言うが、驚異的な記憶力に理解力、解読力を持っていることがわかった。

初めてもらった教科書を読んだだけで理解し、記憶したそうだ。

「だけど、それだけじゃなかったんですよ……。」

そんなにテストでいい成績を収めていれば、さすがに怪しまれたり、気味悪がられたりする。

人間どんなにがんばってもひたすら満点を取り続けるのは絶対に近いほど無理がある。

そのことでいじめられ、一時期不登校になったことがあるそうだ。

「今ではこのとおり復帰してますが。」

「大変なんだな、天才も。」

私の後ろをテクテク歩って来る龍虎の顔は悲惨に青ざめ、

「会話にぜんぜんまざれないすっね……。」

ボケーッとしてる翔と話していた。

雑談しながら学園に向かう。

「課題受けるんですよね？」

匣が口を開いた。

「そのつもりよ、昨日私の失敗で課題が終わらなかったから。」

今日こそはケルベロスを殺ってみせる！！

「じゃあ僕たちも行かせてもらっていいですか？杏姉さんもいいよね？」

「ええ♪かまわないわよ？」

即答したあたり姉は弟の好きにしてあげたいみたいだ。

「じゃあこの後すぐに集まって行きましょうか？」

いつの間にか意気投合していた。

昨日みたいに裏門に集合することになった。

新しく創った聖剣デュランダルは鞘がないのでそのまま腰のベルトに挿してある。

「昨日の恨みを晴らすのが先決だな。」

昨日の人形師≪パペットマスター≫に屈辱を晴らさなくては。

「美鶴張り切ってるね。俺も足を引っ張らないようにがんばるよ。」

翔にしてはいい心がけだと思った、振り返って見ると。

「てかデカッ！！」

制服姿に巨大な鋏を背負っていた、見た目どおり取っ手は青いプラスチックみたいな見た目でそこから銀色の刃が伸びている。

大きさは私の身長並みだから１７０ｃｍぐらいあると思う。

「本当に魔具なんだろうな？」

「大丈夫。」

なんだか心配だ。

集合場所にはすでにみんなそろっていた。

「相変わらず龍虎は普通だな～。」

「？　鎌にローブって普通っすか？」

そんな意識だからマイナーと思われるのさ。

「最近の魔女もののアニメとか漫画でも見て思いついたんだろ？」

「グサッ！！」

スルーアンドスルー、口で言っても突っ込みは入れない、これが美鶴クオリティ。

「それはさておき、匣も杏もすごいな！」

二人とも重装備とは言わないがきっちりと何の役割を果たすかわかる装備だった。

姉の杏は、身軽そうな必要最低限身を守れる簡単な鎧をみにまとい、両手に拳を守るプロテクター兼武器であると思われるものをつけていた。

弟の匣は巨大な盾をひとつに、防具はひとつもなく、いたるとこに銃を持っていた。

「言うこともないと思いますが、」

杏が振り返り、

「私は前線で拳を振るい、匣は後衛での戦略になります。」

……今思うとこのグループめちゃくちゃ戦いづらいかもしれない、前衛が多すぎる、私に龍虎に翔に杏にそれに後衛の匣。

「大丈夫かな～？」

不安が高まった。

「おっ、あそこにいるのって幾月じゃないか？」

掲示板にクエストを見に行くとき上の階から降りてくる少女の姿が見えた、その姿は確かに龍虎に見せてもらった写真の少女だった。

ギロリッ！

迫力のある睨みをもらってしまった。

「なんなんだ？」

不思議に頭を傾げてしまったがどうでもいいかとも思った。

後についてくる杏たちも特に気にしてはいないようだ。

掲示板を見ると、

「さてと、未剣は、っと……。無いな、他の下級生と行ったのか。」

しょうがないな、

「皆、誰がいいと思う？」

急に聞かれてもという顔で掲示板を眺めている。

いくら見ても特に誰がいいかなんてわからず、ふと見た事のある顔を見つけ、その人にすることにした。

「今日はよろしくお願いします。」

呼び出されたのは定食屋のお姉さんこと倉島遥子≪くらしまようこ≫、彼女も三年生だったらしい。

「蒼乃条さんからお誘いがあるとは思いませんでした！！さっきはうやむやになりましたが今度こそ握手してください！！」

私との握手で何がうれしいんだろう？

それじゃあ本題に入ろうか。

「今日受けるクエストはズバリ！！」

「そうでしょう！！っす。」

ぶちっ。

……この映像はお見せできないのでしばらくお待ちください……

「さてまるおはほっといて、今日受けるクエストはケルベロス討伐になります。」

「あの～質問いいですか？」

しずしずと右手を上げる匣。

「何だ？」

「相馬さんは大丈夫なんですか？」

後ろではぼこぼこにされた龍虎がダウンしていた。

「大丈夫大丈夫、あれぐらいじゃ。あれよりも翔のがたちが悪い。」

「？」

「ひどいな、俺のどこがたちが悪いのさ？」

「いろんな所、語るのに三日かかる。」

「ひどい！！」

まあいいでしょう、それで。

「僕たち三流魔術師でも倒せるんですか？」

「多分。」

だらだらと匣の額から汗が流れた。

「じゃ、行きましょうか。」

私たちは裏門を抜け、裏に広がるありえないジャングルに進んだ。

「俺からの提案なんですが。」

翔が唐突に口を開いた。

「二手に分かれて洞窟を見つけませんか？」

翔にしてはなかなかいいことを言うな。

「そうするか。では……私と杏と匣、翔と遥子さんと龍虎で三人ずつ別れて探そう。集合はこの場所で、わかったら何らかの方法で伝えよう。」

「そうですね。この辺はあまり危険な悪魔なんかもいませんし、別々に行動しましょう。」

別々にわかれてさがすことにした。

どうやら天は私の味方らしい。

昨日散々世話になった人形師≪パペットマスター≫に会わせてくれたのだから。

昨日と同じく次々と展開されていく龍牙兵≪スパルトイ≫、しかし昨日と違って一瞬で周りを囲まれてしまった。

「こいつら、下級悪魔の分際で戦い方を心得ているわ。」

拳を構えながら杏が言った。

「杏は手を出さないでね、あと匣も。こいつらはあたしがやる。」

言うなり術者であると思われる一回り大きい骸骨に翔けていく。

当然行く手には何体も龍牙兵≪スパルトイ≫が待ち受けている。

手に持った骨の剣を振り下ろし、切りかかってくるのをデュランダルを引き抜いて防ぐが、じゅうと嫌な音を立てて、柄を握っている手を現在進行形で焼いている。

「痛っ！！」

何か作るうえで間違ったか？いや間違ってはいないはずだ。

ならなぜ？

……まあいい、いまはそんなことより、目の前の敵を倒すことに集中しよう。

「ふっ！」

龍牙兵≪スパルトイ≫を剣ごと切りふせ、一直線に術者に翔けていく。

何体も何体も目の前で砕けていく龍牙兵≪スパルトイ≫、感覚が澄み渡っていく。

剣が相手に触れる感覚が骨なのに生生しく、切っ先が突き刺さり、骨を砕き、粉砕し、砕け散り、ぼろぼろになり、原型を崩した。

剣があたり、砕ける骨は聖属性に浄化され、ただの魔力に霧散す

る。

何回も何回も剣を振り下ろし、突き上げ、切り伏せ、切り替えし、叩きつけ、そして砕いていった。

戦いになっていない。

相手はものすごく遅くて。

本当に遅くてあくびが出る。

ガシャン、バキン、ボキン、ガラン、ザクッ。

立っている木偶人形に剣をぶつけている。

そして、ついに術者にたどり着く。

あっさりとたどり着いてしまった。

そう、魔具さえあれば負けるなんてことはまず無いのだ。

振り下ろした剣はがしゃんと音を立てて、人形師≪パペットマスター≫を砕いた。

相手にならなかったな、人形師≪パペットマスター≫。

こうして、私の復讐は簡単に終わった。

しかし、問題は洞窟とデュランダルだ。

使うたびに手を焼かれてたら話にならない、その痛みがいつ自分に害をもたらすかわからない以上ばんばん使うのは控えよう。

あたりはジャングルの亜熱帯のように木に囲まれ、方角から道までがわかりづらい。

木を掻き分け、どんどん奥に進んでいく。

途中幾度も悪魔なんかと遭遇したがすべて逃走し、火山の入り口を探した。

今はできる限り力を温存し、ケルベロスに立ち向かうべきだと思う。

それからさらに進むと地面が坂になっていることに気がついた、山が近くにあるのかもしれない。

そうして、本当に火山の洞窟を見つけた。

なにげに長い道のりだった。

「で、見つけたのはいいけどどうやって呼び出す？」

と切り出した何気に私の魔具は派手じゃないから、そんなことができない。

「ではテレパシーで呼びましょう。」

匣が何気にすごいことを言ったではないか。

「テレパシーって！それどうゆう魔術理論なのさ？」

「えっと、いいですか？まず何でもいいので相手の魔力源炉を感じ取り、その魔力の持ち主に疑似魔術回路（イミテーションライン）で干渉すれば後は簡単です、まあ、言うだけなら簡単なんですが、実際は結構難しいです、実際やってみますね。」

言うなり、匣は右手を正面に構え、疑似魔力回路（イミテーションライン）を精製、さらに魔方陣（ルーン）を描く。

描かれた魔方陣≪ルーン≫は三角形の陣を描き、ひとつの辺に対し『我会せず汝に関与せしめる』とかかれ、疑似魔力回路（イミテーションライン）を通じて魔力を吸収していく。

淡い緑色の発光を繰り返しながら三角形の陣は回転し、話したい人に回路を開く。

この疑似魔力回路(イミテーションライン)を用いた魔方陣(ルーン)は、効果が同じでも人それぞれ考え方が違うため、どれだけ似せてもまったく同一の物は作り出せないらしい。

それは魔具にもいえることで、同じものを作成するのは無理であるといっても過言ではないという。

後で聞いた話だが、匣の魔方陣(ルーン)は広域干渉と魔術よる遠距離接続、言うだけ簡単なのはよくわかった。

「無事に相馬さんに伝えました。そのうち合流できると思います。」

疑似魔力回路(イミテーションライン)が魔力に霧散し、魔術の終了を告げる。

「ありがとうな、一時はどうしようかと思ったよ。」

まあ、どうにもならなかったら想像魔術でメガホンなり何なり創ればいいだけなんだが。

「だめでしたら姉さんのガンズで何とかなりましたが・・・」

今聞きなれない言葉を聴いたが・・・

「ガンズって、もしかしてその拳の呪いかなんか？」

見る限り魔具は少なく、拳を主にした戦い方をすると思えば多分そうなのだろう。

「よくわかりましたね？と言うより普通わかりますよね？」

杏が苦笑いを浮かべ、

「私は魔力がそこそこ多くても魔力源炉の属性が機属性らしくて五大元素はもちろん四大元素も機属性だけで、想像魔術と魔方陣（ルーン）で戦う後方支援型の魔法使いタイプにはなれないんです。」

過去に目撃されたと言う魔法使いはまさにＲＰＧやおとぎ話、ファンタジーに登場するような感じで火炎弾を撃ったり、悪魔を召喚したり、大地を盾にしたり、空を飛んだりしていたという、ただここまでなら魔術師でも私のように魔力無限で、高速（しんそう）魔術がつかえればできる、しかし彼らは世界の法則を無視できる。

過去には大陸を沈めた話が残っている、都市伝説や神話、デマやはなく映像が残っている、何かを呟いた長いローブをまとった人物が上空から大陸を見落とし、すこしづつ大陸が海に沈んでいったとされている。

この映像をどうやって撮ったのか、どこから入手したのかは今現在不明とされるが、実際に海中を調べた魔術機関が大陸を見つけたらしい。

そしてもうひとつ、魔術師はこのころから現れたらしく、何らかの関係があるのではと今も調査が続いているらしい。

話が飛んだが機属性しかない杏には、魔具を作ることしかできず、魔方陣（ルーン）による属性攻撃はできない。

その分、魔具作成においてできないことはほとんど無いだろう。

機属性は作成者と前衛と呼ばれ、五大元素を使える魔術師は魔法使いがた機属性以外の四大元素は中間支援の賢者がたと呼ばれる。

もちろん、機属性でも遠距離攻撃や中間支援ができる魔術師もいるし、前衛が得意な魔法使いがたもいる。

杏はきっと前衛が向いていたのだろう。

そうなると私はどうなるんだろう？選択不可のオールマイティかな？

「・・さん？あ・・じょ・さん？蒼乃条さん？」

「・・・！あ、すいません、つい考え込んじゃって。」

魔術師にとって考えることは魔術をよりうまく使うことにつながるが、それが人の話を聞き流すのはよくなかった。

「いいのよ？それで、ガンズとはガンファイアドラゴンズの略で、英語表記だけど文脈はバラバラなの、複数じゃないけど最後にズをつけないとなんか・ね？」

・・・なるほどガ〇ドね。なかなか話のわかる人じゃないか。

「で、その能力は？」

「多分今日使うことになるだろうから、そのときにでも。」

そういえば今日はケルベロス討伐だったな、と思う今日この頃。

相手はケルベロス、なめているわけではないが、人数はそろっている、倒せるだろう。

しばらくして龍虎たちと合流できた。

「美鶴っち〜〜！！大変だったよ〜〜！！」

涙を流しながら走ってくるのは龍虎で、横にそれを遥かに超えた速度で翔が走ってきた。

「そんなの知らん、行くぞ！」

華麗によけてみた結果、顔面ダイブ。

「美鶴〜〜！！」

「さりげなく抱きつこうとすんなっ！！」

カウンターパンチが決まったがＮＯダメージのようだ。

翔も昔からまったく懲りない奴だ。

昔から？

懲りない？

何を思っているんだ？

まだ出会ってから数日しかたっていないじゃないか。

ならなぜ？

私の単なる言葉遣いの間違いか？

いや、昔から考え事をするのが多かった為か、文系の成績は良いし、間違った使い方なんてしたことは無いはずだ。

ならなぜ？

こんなに不安になるんだ？

ただのちょっとした思考に・・・。

ズキンッ

「つっ！！！」

なんだ、この痛みは！

「美鶴？」

何なんだ？

翔が確かに私を呼んでいるのに声が聞こえない。

「く、あああ！！！」

流れ込んでくる。

何かの記憶が。

悲しい話だ。

『この実験体も駄目だろうな。魔力値が日に日に落ちている、中味に喰われるのも時間の問題だろうな。』

実験体？中味？喰われる？

『新しい実験体を探さないとな。あらかじめ用意していた実験体は前回のアレで喰われたからな。』

何なんだ？この集団は？

巨大な施設の中、目の前には人が溶液につかった機械が存在し、あたりを何人もの白衣をきた人物が取り囲んでいた。

『どうだろう？あそこなら大勢の人間がいる、魔術協会の手にかからなかったはぐれ魔術師がいるだろう？』

『そうだな、早くこの研究を完成させて約束の地に行きたいものだな。』

「美鶴！！！」

「！」

目の前で翔が肩をゆすぶっていた。

私の無事を確認したからかゆがんだ顔がほころんだ。

「心配させるなよな、まったく。」

「すまんな。それじゃあいこうか。」

振り返って進もうとしたら、肩をつかまれた。

「おいおい、いきなり意識を失った奴が何言ってやがる！」

「そうっすよ！無理はダメッす！」

「相馬さんや秋山君のゆうとおりですよ？無理はいけません。魔術は人の体調がものすごく密接してるものですから。」

翔と龍虎、遥子さん、いや皆が心配してくれた。

「すまない、少しクラっときただけなんだ。本当に大丈夫だから。いこう！」

なんだったんだ、今のは？

「無理はしないでね？」

そうだな、今はクエストに集中しよう、なに、杏に心配されなくとも、な。

「本当に大丈夫だから、そんなに心配するな。そんな事じゃこの後の戦いに勝利できないぞ？」

少し浮かない顔した奴らも、表情を変え、少しは戦う奴の顔になった。

洞窟はものすごい暑さなのかと思ったが、そんなことは無く、むしろ少しばかり涼しかった。

理由は言うまでも無く魔術による結果論しか出ない。

広域呪、または魔方陣（ルーン）による広域結界によるものだと思われる。
いちよう火山なのだからいくら地下でも少しは暑さを感じてもいいはずだ。
進みながらやはり悪魔などと遭遇した。
当然無視するのが今日の戦法だが、逃げられず追いかけてくる奴も多い。
特に人羽型が多く、奴らは狭い洞窟の中を縦横無尽に翔けてくる。
しばらくして目的の悪魔に遭遇したときは、一番消耗していたのは匣だった。
人羽型はすばしっこく、近接型の戦いしかできない私たちには攻撃が当てられず、遥子さんと匣が相手をした。
匣はハンドガンタイプの魔具を常用していて、呪いはハンドガンよりも弾丸の方に集中的に込められていた。
未剣みたいな乱射タイプではなく、相手を確実に撃ち抜くようだ、何の呪いかは知らないが、なかなかすごかった。
そして驚いたのは洋子さんの魔具、それは紛れも無い
傘だった。

誰がなんと言おうとあれは傘以外のなんでもなく、傘以外であるはずが無かった。

いかにもコンビニで売っている半透明のビニール傘で悪魔の相手をしていた。

戦い方も傘を絞れば剣に、開けば盾にといった具合で、次々に想像魔術で傘を想像し、投擲したり、切り伏せたりしていた。

やはり魔術師はどこか代わった奴が多いのだろうか？

そんなこんなで3年と1年では大きな差があり、魔力源炉のレベルが違う。

それは当然場数を踏んでいるからであり、それだけ頼りになるということでもあった。

洞窟の最深部に近いからかと思ったが、それは間違っていた。

あたりの熱気はこの洞窟にかけられていた魔方陣（ルーン）か広域呪が弱くなたのではなく、その先に存在する何かの熱気だとわかった。

低いうなり声が聞こえ、熱を帯びた空気が流れてくる。

この先にケルベロスがいる。

通路を進むと広大な坑内にでた、その中心には巨大な悪魔がこちらを見据えている。

ケルベロス、三つの頭を持つ犬の姿が多く、ギリシア神話において、地獄の番犬であるとされている、なかなかに有名な悪魔である。

その口からは地獄の業火が吐かれ、その口から吐き出す唾は猛毒を持ち、冥界の門を守る守護者にして、冥界の脱走者を逃がさない断罪者。

ケルベロスの名は、『底なし沼の亡霊』を意味する。

忘れていけないのは、神話で語り継がれるケルベロスは、あくまで、ケルベロスたちの中で一番有名なだけで、この世、魔界、冥界、絶界、平行世界、異次元世界には他にもたくさんのケルベロスが存在している。

悪魔には知があり、本来は人間に干渉したりはしない、人間に害をなしたり干渉するのは神と悪魔を除く魔族が大多数である。

それでもやはりどこの世界にでも戦闘狂、殺戮狂、などが多く存在し、それに対抗できるように神がこの世に魔法使いを生んだのでは、という学説も存在する。

神話は空想なんかではなく、存在する神の戦いをつづった黙示録である。

神話上、ケルベロスには弟が存在し、当然のごとく父、母が存在する。

少しランクの高い悪魔を相手にするときのセオリーは必ず近くに仲魔がいないか確認すること。

悪魔たちは魔物と違い知能を持ち合わせている。

油断をすると返り討ちにあう。

「あいつ、とっくに私たちに気づいていてもおかしくないのに何で。」

犬だからと仮定するわけじゃないが、仮にも冥界の守護者、んな感覚器官が発達していてもおかしくない。

『少しばかり懐かしい香りがするな、お前は何者だ？』

向こうを向いていたケルベロスはいきなり振り返った、なんとも美しい姿をしていた。

毛並みは櫛ですかれたてのようにきれいに整い、長い尻尾は地面に垂れ、りりしい顔立ちをしたドーベルマンみたいな顔が三つ並んでいる。

とても紳士的な悪魔に思える。

あっけにとられていると、ケルベロスは誰かを呼んでいた、お前は何者だと。

「話の通じる相手でよかったわ、倒す必要がなくなるかもね。」

クエストに出ている討伐とは何もそいつを殺してこいというわけではない、ただそこに名が載るのは魔物、犯罪を犯した悪魔、知能をもてなかった悪魔が主に討伐に張り出され、ほとんど会話もできずに襲い掛かってくるため、討伐と変わらない。

犯罪とは、人間がおこす犯罪と同じで、人を殺したり、盗んだり、ここからは異人類に対する法だが人に見つかったり、捕まったりするだけで犯罪者扱いになる。

過去におきたオーバーテクノロジーも大半は悪魔の仕業であり、有名どころはアステカの水晶髑髏、コロンビアの黄金のスペースシャトル、ピリ・レイスの地図、錆びない鉄柱などがある。

これらは過去の悪魔たちが人間と契約し、等価交換で手に入れた代物である。

しかし、それなら契約主が不幸になることで、周りは幸せになるなんて甘い考えではなかった。

進みすぎた文明は絶滅するのはすべて悪魔がかかわっているといっても過言ではない。

進んだ技術を手に入れようと戦いが始まり、悪魔が契約を破棄し、進んだ文明の力が制御できずにその文明は滅びる。

一時の平穏は災厄を呼ぶ撒き餌でしかない。

当時は人間の中に魔術師は少数しかおらず、魔術協会も力足らずで、神にすがるしかなかった。

そんな事が相次ぐと、いずれ世界が壊れてもなんら不思議は無い。

そこからは文献が残っておらず、世界にも存在する暗黒時代、魔術界の第二暗黒時代が始まり、いつの間にか少しは平穏をとり戻したこの世界が出来上がっていた。

悪魔も別にこの世に来てはいけないわけではない。犯罪になるようなことをしなければいいのだが、もし犯罪を犯したら各大陸に存在する魔術学園に移動させられ、処罰を受ける。

処罰は死しか選べない、その死の選択の中でどうするかが悪魔の選択になる。

ひとつは学園生徒と戦い生き残る、当然学園から出れないため死んでるも同然、悪魔と天使以外はほぼ強制的にこれを選ぶことになる。

もうひとつは契約者を見つけること、使い魔と主人の関係になり飼い殺されるか。

この二つになる。

だから話の通じる悪魔は学園の裏では貴重で、大抵は契約し、そ

の主が認めてくれたり、慈愛に満ちた人物なら魔界なり何なり自分の世界に帰してくれることがある。

なぜ、そんな危険にみちたこの世界に来るのか、それはその魔族による、この世界にしか生きていく食べ物が無い、貴重なものを手に入れたい、この世界にしか存在しないものがある。

大抵こんなもので、一日に何万体も捕まっている。

このケルベロスもきっと何かを探しにきたのだろう。

『この少女、人を無視して考え込むなど、人道に反しているな。』

確かにそれは悪かった。

「悪魔がそれをかたるっすか？」

いままであっけにとられながら足を震わせていた龍虎が反論する。

『違うぞ、そこの少女よ。人とは精神、肉体、魂をあわせて人というのだろう？ならば私とて、悪魔である前に人である、違うか？』

「それよりもっす、人とは四肢があり、二足歩行ができ、頭脳をもち、かつ哺乳類であることっす！」

『人間の定理とは浅はかなのだな、私はこのとおり四肢があるし、二足歩行だって可能だ、
頭脳があるから会話をしている、悪魔も哺乳類と大差ない誕生を超える、どこが違うというのだ？少女よ？』

「なんだいいコンビじゃないか龍虎、契約すれば？」

『それよりもだ、私は質問に答えた、そこの少女も私の質問に答えるべきではないか？』

ケルベロスは確かに私のほうを見た、６つの瞳で、気持ちワル！

「私の名前は蒼乃条美鶴、この学え・・・」

『蒼乃条！？し、失礼しました！我が主がお世話になっております、よく見れば確かに対向呪（アンチシャーム）が刻まれてますね、きづかなかった無礼をお詫びいたします、マイマスター。』

いきなりマイマスターって、それより。

「おいおい、親に教わんなかったか？人の話は最後まで聞きなさいって？」

『すみません、今後気をつけます。』

深々と3つの頭を下げた。

「はじめて見ましたね～、悪魔に説教する魔術師なんて、きっとこんなの二度と見れないわよ、匣？」

「う、うん。」

本来は使い魔を説教する魔術師なんてかなり多い、しかし悪魔はそんなの聞き入れず、殺されない程度に反抗している。

目の前には謝罪を繰り返すケルベロスがいた。

「さすが美鶴さんね！ますます惚れちゃいそう。」

ここにレズ三匹目、遥子重要危険人物と判断された。

「まあいいや、めんどくさくなっちゃった、であんたは。

『失礼、私も名乗らせてもらいます。ケルベロス族のマリエルと申します、以後お見知りおきを、役職は・・』

役職？こなせる仕事のこと？

『魔お・』

「ストップ！！！」

思わず大声が出た、また厄介ごとが増えるのが目に見えた、というより聞こえた。

『な、何でしょう？』

ゆっくりと近づいていって、耳を貸すように促す。

巨大な耳は中もきれいで、きれいさにはこだわっているようだ。

「もしかして、魔王の配下か何か？」

口を開こうとしたがその巨体では声を落としても聞こえてしまうだろう、首を縦に振り。

「ちっちゃくなったりできない？」

『人化出来ますが？』

悪魔って、

目を開いていられないほどの閃光があたりを照らし、閃光がやんだ時には目の前に女が立っていた、なかなかに美人である。

短い黒髪に琥珀色の瞳に肩には犬の頭を模した銀色の鎧を輝かせている。

ケルベロスと話をしていると龍虎たちも雑談を始めた、緊張感皆無の場所になってしまった。

「あれってさっきのケルベロスかしら、悪魔って人化も出来るのね？」

杏の呟きにあたりにいた龍虎たちはうなずき。

「美鶴っちは私たちをほったらかしにして話してるっすね。」

それにも皆うなずき。

「美鶴さんさいっっっこうですわ！！！」

遥子にたいしてはため息をついた。

「さっき言いかけたまおってなんでしょうか。」

匣もいらぬところに目をつけるな。

「美鶴にとってはすごく重要な話なんだ、ここで聞かれるとまずい話だっただけさ。」

翔め、気が利くじゃないか。

「・・・てか、ごめんっす！今まで翔の存在自体忘れてたっす！！」

「そんなことという奴にはおしおきだべ～～！！」

龍虎も何気にひどい事いうな。

「そんな古いネタ出すなっす！」

「お前は知らんのか？いまリメイク版が放送されてるのを！！」

「なっ！」

「ふっ！オタクが聞いてあきれるぜ！」

「くっ・・・って別にオタクだなんて触れ回ってないっす！オタクですが！！」

「結局オタクなんじゃねーかよ。」

「そうっすよ！オタクでごめんなさいでしたーー！！っす」

「まったく、いいか、美鶴の部屋なんてなオ」

自分でも驚いた、こんなに早く走れるなんて。

「ふんっ！！」

次の言葉を出す前に翔の腹に右ストレート、宙に浮かび、そのまま吹っ飛ぶ。

「美鶴っち！死んじゃうっすよ！！」

「言ったろ！こいつはたちが悪いんだ！」

実際、ムクリと立ち上がり、腹を押さえるでもなくパンパンと服の埃をはたいている

「美鶴、な」

「にすんのさ、とは言わせない、お前いつ私の部屋を見たんだ？部屋には入るなと何回もいったはずだが？」

しまったという顔を隠せないでいる、きっと今の奴の脳内は言い訳を作るのにフル稼働しているはずだ、しかしな。

「じつは」

「いったよな？私の部屋に入るのは禁止したが、緊急の用ならしょうがないと、しかし、部屋についてばらしたらどうなるか言ったよな？」

昔から隠すなら隠し通せという名言がある。

「い、言ってないじゃないか！」

「私が止めたからな。」

恐れおののくがいい。

「も、もうしない。約束する、だから。」

どうせ。

「ああ。」

「じゃ、じゃあ。」

「極刑」

罰を与えるんだから。

「いぃ！？美鶴、仏の顔も三度までだろ！？」

よく言うな、まったく。

「いいことを教えてやろう」

「私は仏じゃないから一回目から罰を与えるし、仏が許すんだったら警察なんか要らない。どうかな？」

「美鶴の美顔も三度まで！！！」

「3度目には崩れるってのか！？この場で喧嘩売ろうとは上等じゃ

ねーか！」

「ほめてるんだよ！！」

大体ほめ言葉じゃねーだろうに。

「そこに座れ！」

「いや、だって」

「問答無用で座らされるのと傍若無人なまでに座らされるのと圧倒的な力の差で座らされるのどれがいい？」

「選択肢ないじゃん！！」

言うなりぺたんと尻をつき、正座を取った。

「さて、1，2，3、のうちどれがいい？」

「3番！」

「却下、二番の刑を実行する、拒否権も却下権も通用しない。」

うなだれる翔を後にし、ケルベロスの元に向かう。

「二番の刑って何なんですか？」

杏がさりげなく翔にきき。

「美鶴が毎日手料理をご馳走してくれる。」

「うれしくないの？蒼乃条さんの手料理。」

「簡単に訳すと、朱の参番を毎日食べることにつながる。」

ああ～～、とうなる翔の声が聞こえた。

ケルベロスの名はマリエル、魔王イクシスの配下で、魔王城の門番をやっていたエリート悪魔。

イクシスが退治されたとき、たまたま異世界に存在する薬を調達しに行っていた為、帰ってきたらほとんどの悪魔は死に絶え、魔王城の最深部でもある王座のところに初代勇者である蒼乃条がいた。

襲い掛かろうとした時に魔王の補佐をしていたという彼の弟が語ってくれたという。

最後まで必死に魔王を救おうとし、肉体を分解されてしまった今でも復活を約束してくれたと。

それに少しでも協力しようとしたところ、勇者の1人にやられ、死に掛けて逃走していた時に一般人に見られ、魔術協会に捕獲されたらしい。

その日から、来る日も来る日もいつか、魔王にゆかりのある、蒼乃条の名に出会えると信じて今まで戦い抜いてきたと言う。

「そうなの、で、それなら龍虎と契約してやってくれないかしら。」
『なぜです？私は蒼乃条様とともに！』
私としてもそうしてやりたいが。
「いい？私には属性値がまったく無いの、だからマリエルに力を貸したり借りたりできないし、武器も防具もすべて聖剣や魔剣、のろわれた過去の遺産に頼らないととてもじゃないけど作れないの。」
この間の身体検査ででた結果は過去数件存在したイレギャラーと一致した。
魔力源炉からの魔力供給量無限、マナからの魔力吸収０、魔力源炉の属性、すべてに該当せず、つまりは無属性。
何を生み出そうと中途半端にしか作れない半端者。
過去数件と言うのはご先祖様たちで、魔王の体が集まらないのは取ったりとられたりを繰り返しているためであると聞いた。
使い魔と契約するに当たって重要なのは契約内容と、お互いの属性値の相性である。
ケルベロスは言うまでも無く、闇と火であり、無属性の私はマリエルに魔力を与えられず、魔具を作ってもマリエルには使えないため。
お互いの属性の相性がよければそれに見合った魔具に魔力付加も

できる。

契約者は悪魔の自由を奪う変わりに戦うすべを与え、守るすべを与え、生きるすべを与えなければならない。

私には・・・なにもしてやれない。

だからこそ最も相性のいい龍虎と契約することで近くにマリエルを置いておくことができる。

どうにか納得してもらい、二人は契約を済ませた。

契約の仕方はいろいろあって、魔術師が好んで使うのは、口約束。

口約束だからと契約を忘れたり、破ったりすればそれは大変なことにつながる恐れがある。

そんなこんなでケルベロス退治は契約によって終わり、洞窟を抜け寮に戻ることにした。

洞窟内を歩いているときに違和感を感じた。

だんだんと魔力源炉が反応している、体内を流れる魔力量が急に増え、魔章紋よりあふれ出る。

これでは、あの時と同じ。

きっと何かが来る。

「あのさ、私もうちょっと散策していって良いかな？」

「どうしたっすか？急に。」

私の事情に皆を巻き込むのはルール違反だ、迷惑をかけてはいけない。

「今度剣を作ってもらおうと思ってるんだけど、せっかく洞窟まできたからさ？鉱石でもと思って。」

「1人で大丈夫ですか？」

匣、お前は寮までしっかりと杏を守るんだ。

「大丈夫、マリエルが残ってくれるだろ？」

「じゃあ、私も」

遥子さんはバイトがあるんだからかえって休むといい。

「遥子さんは明日に備えて休んでください。」

「じゃあ俺も残るよ、かえっても暇だし。」

「良いのか？危険が待っててても逃げ出すなよ？」

わかりづらいだろうが魔王がらみだとわかってくれただろうか？

「大丈夫だって、女の子残して逃げ出すわけ無いだろ？」

しっかりと私を見つめ、そういってくれた。

わかってくれたのだろう。

「それじゃ、気をつけて帰れよー！」

「美鶴っちもー！マリエルーー！しっかりと守るっすよーー！！」

『わかっている。』

すでに仲良く会話できるようになったのか、普通に接していた。

そろそろ本題がやってくるころかな？

私たちがマリエルと話していた広大な空間にカツン、カツンと冷たい石を靴で叩く音が聞こえる。

この空間に現れたのは、背丈の小さい少年だった。

「お前も勇者の末裔か？」

間違いないことはこの体が知っている。魔力回路が焼けるほどの魔力を流し、あまった魔力が体から流れ出す。

「そうだぜ、勇者の末裔、焔諒路（ほむらりょうじ）とは俺様のことさ！！！」

「勇者の中で一番の落ちこぼれ家が何言ってやがる！」

こいつぜったい挑発に乗りやすい奴だ！

「なんだよ！その安っぽい挑発は！！馬鹿もほどほどしときな！」

あてが外れたな。

奴の魔具は・・・竹箒？

いや油断しちゃいけない、傘であの強さ、何気ない日用品はものすごく強いのかも知れない。

「翔たちは離れてて！！」

「おらよっ！！」

急に竹箒が近くなったのかと思ったら、竹が伸びていた。

広がっている分逃げられないし。

ブレイクソードに、と思ったが目の前にはマリエルがいた、

「任せてください。」

体からあふれるは闘気、口からあふれるは熱気、吐き出されるのは溶気。

灼熱を帯びた炎が竹を焼き、灰ではなく魔力に霧散させる。

しかし、油断していた。

「そんなのはわかってんだよ！！」

すばやい動きで移動したのかマリエルの側面は焔が姿を現していた。

「マリエル！！」

私の叫びは遅かった、殴られたマリエルはものすごい衝撃に見舞われたように宙を舞い、壁に突っ込んだ。

起き上がってくる気配が無い。

さっきの竹箒はただの時間稼ぎで、本来は強襲するための捨て札だった。

「なさけね～な～！魔王！！こんなに簡単に横を取られるなんて。」

ブツッ、と意識が切れかけた、裏拳で殴られていた。

頭が揺れる、考えがまとまらない。

地面に投げ出された体は無防備で、攻撃を受けたらそれこそ負けてしまう。

なら、頭を守らなくちゃ。

ゆっくりした動きで私に拳を叩きつける。

腕がしびれてきた、殴られる痛みも消えてきた。

そうだよ、普通の女が勝てる相手じゃない。

相手は根っからの魔術師で、魔術をちゃんと理解している。

立ち上がりかける翔に手を出すなと片手で合図する。

あいつは普通の人間なんだ、魔力による肉体強化なんてしてないし、魔具もそんなに強いものでもないだろう。

ここは私1人でどうにかしなきゃいけないんだ。

二人を守らなきゃいけないんだ！

考えろ、活路を切り開け。

あいつに格闘戦を挑んでも勝てない、肉体はボロボロなんだ、万に一つも勝ち目は無い。

だったら誰にも負けないものがある。

世界最強の魔眼が。

少しだけ隙が生まれればいい。

そうすれば魔具が使える。

高速魔術(しんそう)が使えれば少しくらいなら・・・。

考えろ、高速魔術(しんそう)は何かしら自分に関連する何かがキーワードになっているずだ。

無属性・剣・女・魔術・魔力・魔王。

これぐらいしか出てこない。

もしかしたらこの中に高速魔術（しんそう）の一片が埋まっているかもしれないし、無いかもしれない。

それでもかけるしかない、

運命はまだ続いていると信じている！

叫べ、自分が決めた言葉を！！！

自分を取り囲む全てを繋げる言葉を！

「魔王！！！」

一瞬にして視界が真っ白に染まった。

成功か、ならすぐにでも思考を広げねば、未剣みたいに高速魔術の全文がわかったわけじゃない、単語だけではすぐに効果が消えるだろう。

とっととあいつに隙を作れるものを。

長い棒を！

精製が始まると同時に高速魔術は止まり、目の前にはさっきの光景がよみがえった。

大方精製が終わった、あとは出す瞬間を見極めるだけ。

焔が大きく右手を上げた！今なら！！

動かない腕を肩ごと動かし、魔章紋を焔に向ける。

「くらえ！！！」

ただの長い棒は焔の喉にぶつかり、そのまま吹き飛ばした。

精製するスピードが速かったからか銃からでる弾丸のように飛び出した。

相手が苦痛の呻きをあげる中、すばやく立ち上がるが、腕が鈍い。

それでも、これしかない。

ブレイクソードを握り、魔力を流す。

この剣では奴を倒せないが、少なくとも奴の魔具は粉砕できる。

焔が戦闘不能に陥るまで魔具を破壊するしかない。

「こ、この野郎！」

震える両腕に無理やり魔力を流し、何とか力を込める。

奴との距離は６ｍ弱、これだけ距離が離れていれば急な反撃を受けることも無いだろう。

「残念だけど、野郎じゃないわ、糞餓鬼！！」

ほとんどから元気で、気を抜いたら剣を落としてしまいそうだった。

「女はおとなしくしてればいいんだよ！！」

奴が取り出したのは小型のナイフ。

「餓鬼はおとなしくお家でママのオッパイすってな！！！」

奴の戦闘スタイルは高速戦のようだ、厄介なことに剣を大振りした瞬間懐に入られ、今度こそすべてが終わってしまう。

そのためのナイフだろう、他方向からの投擲には大振りしなければこの剣じゃ防げない。

「その減らず口！！縫いとめてやるよ！！！」

気合で負けるな！今は空元気でも相手に弱気を見せたりなんかできない。

「その生意気な面！二度と直視できないようにしてやる！！！」

左手を前に出し、魔力を流す。

どうやらあては外れたようで、魔力でできたものではないようだ、

こうなってはデュラハンはただの手甲に過ぎない。

左手の硬度に頼ってナイフを受け止める。

ナイフは本当におとりだったようで、ドンドン迫ってくる。

本来は私も少しだけ高速戦をするのだが、なにぶんからだが自由で無い今剣を振り回すのがやっとで、とても高速戦を繰り広げることなんかできない。

今の私にはこの長大な剣を持って、迫りくる魔力を振り砕くしかない。

これはまだ序章である。

私にはまだまだやることはたくさんある。

それがこんなはじめに負けていいはずが無い。

私は皆のところに帰るんだ。

いつもどおりの生活に戻るんだ。

奴なんかが障害になっていいはずが無い。

だからこいつを倒すんだ。

さあ、かかって来い。

ぐぅの音も出ないほどにコテンパンにのしてやる。

奴との距離がだんだんせまってきた、このままいけば剣の射程半径に入ることになる。

ナイフを飛ばした後はひたすら距離を詰める、その後またナイフを飛ばして距離を詰める。

その事から奴はこちらが飛び道具の類を持っていると判断して、反撃の余地を与えないように攻撃を繰りだし、そのまま懐に飛び込んでけりをつけるつもりなんだろう。

そんなことはさせない、懐に入られたら私に勝ち目は無い。

何発受けるかわからないが、奴の攻撃をチャンスに変えるしかない！

ナイフを投げた瞬間にできる限り避け、駆け出す。

腕に足に体に痛みを感じる。

しかし、その痛みが私をこの地上に立っていると教えてくれる。

まだ倒れていない、と。

焔は進んでくる私を好機と見たのかそのまま進んでくる。

一歩一歩が確かに奴に歩を進める。

奴が腰のポーチから取り出したのは小さな拳大の黒い玉。

それを私に投げつけるのかと思ったが、投げたのは私の後方だった。

しかし、私は気づいてしまった。

気づかなければ、もしかしたら奴を倒せたかもしれない。

投げた瞬間にブレイクソードを振り下ろせば黒い玉を壊せたかも知れない。

しかし、玉は後方に飛び去り、そのまま翔の下に飛んでいく。

一部の狂いも無く、ただ真っ直ぐに翔に向かっている。

しかし翔は動かない、奴の目はどこか違うところを見ている。

魂ここにあらずというような目をしている。

避けてくれ！！と叫んだつもりが声が出ない。

いくらやろうとしても声が出ない。

なのに体は限界を超えて走る。

腕はすでにブレイクソードを手放し、体は痛みを感じないほど痛みを覚え、走る足には地面を踏みしめるほど力は無い。

それでも体は翔けていく。

あいつには見えていない、私との戦闘に使うのだから、きっと何かよくないものが詰まっているに違いない。

信じられないほど体が動いた、こんなに体が動くなら私はまだ戦えたんじゃないんだろうか。

いつの間にか体は翔の下に駆け抜けた後で、目の前には黒い玉があった。

翔にはあたらない、私がいるんだからな。

ここで終わりなんだろうか？

ごめんね、皆・・・。

「ぐ、ぐあぁ！！！」

玉が肋骨を砕いた、あまりにも痛々しい音が鳴り響き、そして体には他方向から同じ衝撃が迫る。

腕の骨が折れ、足の骨が折れ、関節がはずれ、あちこちの骨が砕ける。

わずかな望みであった聖剣は真っ二つに折れ、
体と同時に戦いの意思も折れてしまった。
完全に私の敗北が決まった瞬間でもあった。
硬い石の洞窟内に投げ出された私を見下ろす翔の姿を見た。
「お、遅いんだ、よ、起き、るのが。」
そんな憎まれごとを吐くのが精一杯だった。
「み、みつ、る？」
もうまぶたを押し上げる力さえ残っていない。
私を呼ぶ声が遠くから聞こえてくる。
ごめんね？さようなら。
「うおおおおぉぉおお！！！おまえーーー！！！！」
私は意識を失った。

◆

気がついたのは揺れ動く何かの上で。

少し顔を動かすと、翔の顔が見えた、しかし、言葉が出てこない。
もしかしたら翔の顔をした死神なのかもしれない。
私が負けたから翔もマリエルも死んでしまった。
魔王復活の夢も消え、私が普通の生活を送ることも泡の藻屑へと消えた。
死んだらどうなるんだろう？なんて考えを持たない。
この世には死者だっていたし、亡霊なんかもいた。
だから天国も地獄も煉獄も存在する。
私はどこに行くんだろう？
こんな私はどこも迎え入れてくれないくれないかもしれない。
地獄か煉獄が迎えてくれれば少しは私の罪悪感も消えるだろうか？
だれか私を責めてくれればいいのに。
だれか・・・。

◆

何なんだ？これは？

戦闘が始まったとき、自分のふがいなさに己を呪った。

本当は自分に言い聞かせて、　恐れる体に鞭を振るって戦いを受け入れようとしたのに。

何もいえなかった。

美鶴に言われるままに下がってしまった。

戦いは一方的だった、美鶴は反応するのが精一杯みたいで、床に倒れてしまった。

しかし、反撃が決まりここから始まると思っていた瞬間に、何かがこっちに飛んでくる。

そこで何もかもが終わった。

目の前で美鶴が砕けていく。

それこそ骨の折れる音が体中から聞こえ、　自信に満ちた美鶴の背中は崩れ降りていく。

目の前には石の地面を転がる人とはいえないほどにボロボロになった美鶴が僕を見上げている。

「お、遅いんだ、よ、起き、るのが。」

必死に振り出したような声が聞こえた。

「うおおおおぉおお！！！おまえーーー！！！」

信じられなかった、美鶴が負けるのが、自分のせいだったのが。

自分でも理解しがたいほどの怒りがこみ上げてくる。

きっとこの怒りはあいつを許さないだろう。

きっとこの怒りはあいつを殺してしまうだろう。

きっとこの怒りはあいつを死なせてしまうだろう。

こんな魔術の使えない体で何ができるのだろう？

できるさ、あいつを殺すのなんて簡単だ。

この怒りを形にできたらと思ってしまう。

あいつは何をするでもなくこっちをみていた。

その姿に更なる怒りを覚え、思わず駆け出していた。

奴の姿はすぐ目の前に現れた。

「お、まえがーーー！！！」

振りぬいたこぶしは奴を捕らえ、後方に吹き飛ばした。

「ぐ、何すんだ！！」

ナイフが飛んできたが肌には刺さらない。

あたっては弾かれていく、いままで邪険にしていたこの体も今はだけは感謝している。

「お前を！！殺してやる！！！」

呪いの言葉を放ちながらもう一度奴に近づく。

「ちっ！何なんだよ！！その体はよっ！！！」

腰のポーチからあの黒い玉が出された。

あれにあたるのはさすがに得策ではない。

しかし、奴は投げるどころか急接近してきた。

直接当てる気か！？

しかし、これは違う意味でチャンスでもある。

近づいてきた奴を捕らえられれば止めをさせる。

一か八かの賭けでもあるが、かけてみることに意味はある。

一瞬の勝負だった。

確かに手ごたえがあった。

自分の背骨が砕ける感触が・・・腕が落ちる音が・・・足が挫折する音が・・・。

俺も負けてしまった。

なんでこんな奴に負けるんだ。

許せない、こんな奴に・・・。

力があれば、力があれば、力があれば・・・。

誰だってそう思うだろう。

何をするのだって力さえあれば苦労しないのだから。

奴は・・・力でねじ伏せられるのに。

力が無いから、何もできなかった。

隣には美鶴がいた。

ごめん、美鶴。

そっと手を伸ばして美鶴に触れる。

「敵討ちは無理だったよ。」

悔しくて涙があふれた。

≪何をしている？≫

（？）

≪力はあるだろう？≫

（そんなのないよ。）

≪力は持っているだろう？使い方を知らないだけさ。≫

（使い方？）

≪そう、使い方を、君も君のお友達も・・・。≫

（使い方・・・。）

≪さあ、きっかけをあげよう、再び奮闘してくれ。≫

（きっかけ・・・。）

≪君には期待しているんだ、さあ、目覚めよう。≫

≪我が・・・よ。≫

目覚めは突然だった。

目の前には翔がいた。

立ち上がると驚きを隠せない焔の姿を見た。

何が起きたのか？

しゅるりと音を立ててベルトが地面に落ちる。

その瞬間、すべてが変わった。

侵食は体を包み、それこそすべてを変えた。
肉体は形を変え、まがまがしい形へと変貌を遂げる。
漆黒の鎧に真紅の爪を生やし、強大な翼を広げ、最強の魔力をあらわにした。
その姿こそ世に恐怖の象徴として降臨し魔を束ねる最強の魔族。
それこそが“魔王”。
まだ肉体がそろっていないためか肉体は中途半端で、完全な力は使えない。
この姿も伝承に残る本来の姿とは別で最強と呼ばれるようなものではないのかもしれない。
翔も続いて立ち上がり、本来の姿を現した。
「何なんだよ！？何なんだよ！？」
閃光がほとばしり、焔は硬く目を硬くつぶった。
その体は邪を払い、その眼は邪を除き、その口からは邪を焼き払う炎を吐き、強大な手はすべてをなぎ払い、その強大な翼はすべてを吹き飛ばした。
その存在は悪魔にとって最悪の相手で、何に対しても最強であり続けた。
存在自体が聖で、邪は存在さえ許されなかった。
そんな奴はその存在から自分自身を呪った。

どうして自分の周りには誰もいないのか。

この体を呪った。

それでも戦い続けた。

いつしか友達が・・・。

あいたこの胸の空白を埋めてくれる何かがあると信じて・・・。

邪を払う聖なる存在。

“聖龍、シャイニングドラゴン”。

生まれたときからその存在は悪を滅ぼし、正義を行った。

名前に負けぬ輝きを放ちながら、何千年も前からこの世界を守っ

てきた。

白い光を放ち、強大な牙を覗かせ、長大な尾をたなびかせ、絶大な力を構え、その存在は隣に立っていた。

シャイニングドラゴンはその白い巨体を震わせ、口から白い炎をのぞかせる。

「翔、行くぞ！」

「ああ！！」

その口からつむがれる言葉はいつもの二人だった。

翔ける黒い災厄を身にまとった悪魔は手に聖剣を掲げる。

折れてしまった痛々しい聖剣。

焼ける手も気にせずに無理やり概念を入れ替える。

概念の変わった聖剣はみるみるうちにその姿を変えた。

その剣は呪われた力を放ち、すべての願いを三度かなえるという呪いの魔剣。

北欧神話でオーディンの末裔スウァフルラーメが黒いアールヴの名匠に言って作らせた剣。

“柄もベルトも金で錆びず切れぬものは無く、狙ったものは外さない剣を作れ、作れなければ殺す”

このおどし文句のもと作らされ、出来上がったのは三度の願いをかなえる代わりに必ず持ち主が破滅の道を歩むという呪いのかかった魔剣。

栄光と破滅を与えるこの剣はまさに魔剣と言う名のふさわしさがある。

しかし、いくら魔王でも三度の願いなんかにはできないし、切れない錆びない外さないなんてできない。

それでも私に必要なのはその名前と属性で他ならない。

聖剣は属性を失った時点でもう聖剣どころかただの剣ですらなかった。

後はその残りかすを剣に変えるだけ。

もう一度だけ生まれ変わる。

その刀身は黒く輝き、柄は黄金の輝きを放ち、その禍々しさと存在感をあらわにする。

刀身からはどす黒い闇を放ち、すべての存在を否定し、すべてのものに平等に消滅を与える魔剣の中の魔剣。

“魔剣ティルヴィング”。

あまりメジャーな魔剣ではなく、、　魔剣と聞けばレーヴァテインやバルムンクが有名なのは確かだ。

それでも魔剣としての禍々しさはどれにも負けない。

さあ、この戦いに終焉をもたらそう。

負けるはずが無い。

この世の属性を持ちえる聖と闇がそろっている、しかもその二つともが世界の頂点に最も近いものである。

これで負けたりしたらきっとこの世界は嘘でできている。

「な、なんで！何であんな奴がいるんだよ！！！聞いてねーぞ！！！シャイニングドラゴンがいるなんて・・・聞いてねーぞ！！！！」

焔はその場でただただ悲痛な悲鳴を上げているだけだった。

それだけで勝負はついたも当然だった。

翔けていた足は止まり、目の前には小さくうずくまった焔の姿が見えた。

さっきまでのくそ生意気な姿が想像できないほどがたがた震え、その瞳からは信じられないものを直視し、涙をひたすら流し続けた。

その姿に私は。

迷わず手を上げた、実際は蹴り上げた。

ものすごい衝撃音に私自身が驚いた。

空中を浮遊し、地面に叩きつけられる。

みぞおちに決まったけりは内臓を破壊したのか胃液と血をドバドバ吐き出し、息も絶え絶えに倒れている。

正に“泣きっ面に蹴り”といった模様（こんなことわざは存在しないが）。

「美鶴、後は俺がやる。」

一歩ずつ焔に歩みいく。

輝ける白銀の聖龍はその存在を忘れ、自分の正義を崩そうとしている。

その後姿に声をかけようとした瞬間。

空間が凍りついた。

あたりの温度がさらに下がったような悪寒に震えた。

そいつは空間を引き裂いて焔の前に正体を現した。

そいつは見るだけで相手に存在を否定され。

そいつはすべての存在を否定し。

そいつはあらゆるものの存在を狂わせる正体を持っている。

それがはじめて奴をみた自分自身の感想だった。

手に持った小さな脇差が空間を切り裂いている。

白銀の長髪をたなびかせ、黒の服を着、赤い眼を輝かせ、そいつはこっちを見ていた。

冷徹な表情をしたあいつからは何の感情も読み取れない。

あいつは相手にしてはいけないと本能が告げていた。

魔王の力の一部を持っているにもかかわらずそう思った。

危険なんてものじゃない。

あいつにかかわったら何もかもが無かったものにされてしまう気がした。

そして、あいつの口が開いた。

「焔、何をしている？帰るぞ。」

口から吐き出される言葉は冷徹で、相手に拒否を許さない。

しかし、焔は何もいえない。

せきこみながら必死に声を上げようとしているが咳き込むだけだった。

何がそんなに私たちに恐怖を与えるのか、何も行動が起こせなかった。

「焔が世話になったな、蒼乃条美鶴。」

やばい、表情には何も変化はおきず、感情の高ぶりも感じられなかったが、あたりの空気が冷気を纏ったかのように冷えていく。

明らかに何かの兆候のように思えた。

小さな脇差を一閃するとそこから空間が裂け、中から闇があふれ

てきた。

私とそう変わらない大きさの漆黒の鎧、手には巨大な槌を持っていた。

「お前らにはそいつの相手をしていてもらう、さあ、行くぞ焔。」

地面に転がっている焔を抱え、脇差を一閃した。

「待て！お前は何なんだ！！」

とっさにその言葉だけが出た。

振り向いた赤い眼は答えた。

「楠井章二（くすいしょうじ）、お前らと同じだ。」

それだけ告げるともう用は無いかのように切り裂いた空間を通り抜けた。

それを見計らったかのように漆黒の鎧が襲い掛かってきた。

巨大な槌を振り下ろした。

とっさにデュラハンに魔力を流す。

槌を受け止めるが、それだけだった。

魔具のＲＡＮＫが違いすぎる、デュラハンメキメキと音を立てる。

単なる攻撃力なら軽く私を超えている、この槌は私には防げない！

とっさに槌に横からの打撃を与え、ずれた瞬間に距離を離す。

魔具の相性が悪すぎる、ここは翔に任せるか？

振り向いたところで驚いた。

すでに翔は違う鎧と戦っていた、真紅の鎧に大きなガトリングを持った鎧と。

ただし、向こうは意外なほどに一方的な戦いだった。

真紅の鎧はガトリングでの射撃しか行わず、距離を置いて撃ちまくっている。

それに対し翔、シャイニングドラゴンはその銃弾の嵐に向かっていく。

見かけの巨体に似合わずその行動はすばやく、巨大な手を振りぬくがかわされる。

銃弾はシャイニングドラゴンの鱗にはじかれまったく効いていなかった。

多分向こうは時間稼ぎなのだろう、私に手出しさせないための・・・。

これで私の勝率がグンと下がったのは言うまでも無かった。

多分あいては人ではないと思う、的確な動きを見せるところから相手は悪魔である可能性が大きい。

そうなると本物のデュラハンかもしれない。

デュラハンは最近は首なし騎士であるとの話が有名だが本来は女の妖精であるといわれている。

しかし、そこのところがはっきりしないのは両方とも確認されているためだ。

その事から首なし騎士と女の妖精は別の悪魔かもしれない。

そんなことはいいとしてもデュラハンであるなら更にたちが悪い。

奴に致命傷は与えられない、なんせ生物における弱点の一つである頭がつながっていない、頭に関する弱点はそんざいしないといっても過言ではない。

そうなればあの槌をかいくぐって体を破壊するしかない。

そう思うと更に相性が悪いと思える。

こんな考えているなかひたすら防戦になっている。

攻撃の手段が存在しないのが大きな理由である。

こちらにあるのは魔剣ティルヴィングだけ。

この魔剣ティルヴィングで相手が切れれば私の勝ちだが逆に切れ

なければ私の負けが決まる。

用は一撃の勝負になると決まっている。

切れれば戦いは終わるが、切れなければ槌で脳天を砕かれる。

ブレイクソードがあれば槌は破壊できるが、残念なことに漆黒の鎧の向こう側にあり、奴はその剣の危険性をわかっているのか近づけないように間合いを取っている。

情けない、何が魔王の力の一部を持っている私が、だ。

その力さえ使いこなせない私は何なんだ。

こんな剣なんか・・・。

？

今何か頭をよぎった・・・。

考えろ。

考えろ考えろ考えろ。

考えろ考えろ考えろ考えろ考えろ。

何か重要なことを忘れている。

剣・・・。

！！！

思いついた、私はおろかな考えをしていた。

なにも剣で倒さなくてもいい、この考えが思いつかなかっただけなのだ。

そう、なにも剣は絶対に使わなくてはいけないものではない。

ただかってにそう思い込んでしまっただけだ。

初撃を魔具デュラハンで防いだときに確かに拳でずらせた。

剣で戦うより拳の方が早い、それなら打撃の後に槌の範囲から離れるのは簡単だ。

本来は私だって高速戦をやる、超接近戦型の魔術師。

しかしそれでも問題は残っていた。

私の拳はどれぐらいのダメージを与えられるのか？

もしかしたら私の拳は効かないかもしれない。

それでもやるしかない。

魔剣を地面に投げ捨てる。

そのままファイティングポーズをとり、漆黒の鎧と向き合う。

もちろん格闘技なんてやったことは無い、本来は普通の高校生になるそこら辺にいる中学生となんら変わらない女だった私だ。

せいぜいテレビでやっているボクシングなんかを見るぐらいで、それぐらいの知識しかなかった。

こんなんでどうにかなるのだろうか？

いや、どうにかするしかない。

私は駆け出すことにした。

どっちにしろもうこれしか方法は無いのだ。

やってみてどうにもならなかったら他の方法を考えればいい。

目の前に漆黒の鎧が迫る。

振り下ろされた槌を横とびにかわし、地面に槌が当たるのを確認し、右拳を放つ。

鉄のぶつかる音が聞こえる。

ぜんぜんダメージを与えられない、こぶしがぶつかったところが少しへこむだけで意味が無いように思えた。

こんなんじゃ倒すのに何時間かかるかわかったもんじゃない。

考えろ、何か無いのか。

しかし考えても一つしか答えは出ない、しかしあまりに危険すぎる。

焔の時は本当に運がよかったのかもしれない。

だけど、その可能性にかけてみるのも悪くないかもしれない。

そう、想像魔術に。

ただ今回は何かを創造するわけではない、魔方陣（ルーン）を精製する。

効果は何でもいい、貫通でも爆発でも破壊でも。

漆黒の鎧を破壊できればいい。

神経を集中させろ。

奴は迫ってきている、もう躊躇する時間すらない。

言葉を紡げ、すべての速度を超える最高の速さで、作り出せ。

奴を壊す言葉の陣を！

叫べ！その言葉を！！負けを許さぬ至高の者の名を！！！

「魔王！！！」

その瞬間にスイッチが入った。

すべての速度を超越した最高速の思考速度。

神経を集中させろ、奴の鎧を破壊しろ。

神経を魔章紋から放出する感じをイメージする。

その神経を導き世界の法則に介入する魔法の文字に組み上げる。

円を描き、その中に自分のイメージする陣を描く。

もう目の前には鎧がある。

決めろ！これで終わりだ。

眼を開いたとき漆黒の鎧は横なぎに槌を振ったところだった。

だが、もう遅い。

前に飛び出し鎧の後ろに回りこむ、背中に向き直ると相手が振り向くより先に。

目の前にある魔方陣ごと殴りつける。

一瞬の爆音の後に、鎧のど真ん中に空間ができた。

どてっぱらに風穴ができたと言おうか。

魔方陣（ルーン）はしっかりと精製できた。

円の中に“神鉄を打ち砕く炎帝の拳”と刻まれた魔方陣（ルーン）を拳ごと叩き付けた。

魔方陣（ルーン）が漆黒の鎧に触れるとそこから爆発が生まれ、鎧を打ち砕いた。

イメージは爆発、触れれば発火し、鉄を打ち砕く鎧破壊のための功専魔方陣。

それっきり漆黒の鎧は活動を止め、もう動くことは無かった。

翔はまだ戦闘を続けていた、しかしいい加減頭にきたのか相手を

殴りつけるのをあきらめたようだ。

その強大な翼を広げ、両手両足を地面につける。

翼に大量のマナが吸収されていく、いっそうに輝きを増したシャイニングドラゴンはガパッと口を開いた。

口内から吐き出されたのは炎ではなくレーザーのようだった。

シャイニングブレス、聖属性の粒子を一気に吐き出すだけの事なのに、かなりの威力を持っている。

シャイニングブレスに焼かれた真紅の鎧はその存在すらとどめていられなかった。

こうしてやっと戦いが終わった。

骨折り損のくたびれもうけもいいところだ。

しかし、今日わかったのは自分の無力さ加減。

いくら数えるくらいしか学園に来ていなかったとはいえ自分の力不足は確かだった。

魔王の体は取り返せなかったがとうぶんの目的ができた。
この体になれ、魔術の勉学に励み、ひたすら実践に打ち込むこと。
言うのは簡単だが、実際は大変なことだ。

この信念が折れないことを祈るばかりだ。

眼帯に使っていたベルトを拾い、右眼に巻きつける。
一瞬で意識が途絶えた、疲労が一気にきた感じだった。

目覚めるとそこは見たことの無い部屋だった。
天井は白く、その部屋独特のにおいがする。
きっと誰でも知っている部屋だった。
「保健室？」
横のベットには翔が眠っていた。

しかし、その姿は本来のものとは違った、人間の姿には近いが頭には角が生え、皮膚には所々鱗が現れていた。

ドクンッ！ドクンッ！

心臓が高鳴った、喉が渇く、体が疼く、口が何かを求めている、思考がずれていく、歯が疼く、視界が赤く染まってきた、思考も赤く染まってきた、瞳はずっと翔を見つめている。

何かおかしい、そう考えられるのに、体が反応しない。

ゆっくりとベットから起きる、ふらついた足取りで翔のベットに移動する。

何なんだ、目の前には眠っている翔がいる。

ゆっくりと手を伸ばす、安らかに眠る翔をゆっくりと抱き起こした。

触れているか手が煙を上げている、手が焼ける熱い感覚が伝わる。

そんなことを気にしないようにそのまま翔に体を近づける。

おかしい、何かが起きている。

体の自由が利かない、力が入らない、翔からとてもいいにおいがする。

逃れられない、ゆっくりと翔を抱きしめる。

目の前には翔の首筋がある。

ゆっくりとそこに唇を這わせる、しっとりとした人肌が唇に触れる。

やめろ、何をやるつもりだ。

しかし自分への必死の説得は無駄だった。

首筋に牙をつきたてた。

あふれるように出てくる血を飲み込んだ。

鉄の味が口の中に広がる、鉄なんて舐めたこと無いのにそんな考えが浮かぶ。

止まることの無い血を喉を鳴らして飲み込む。

目の前には壁にかけられた鏡が見えた。

ぞっとした。

自分の姿に恐怖した。

長い犬歯が、前歯が、きれいに並ぶ歯が赤々と血で染まり、唇から血が溢れる。

上気した頬は赤く染まり、その相貌は。

微笑んでいた。

喜びの笑みを浮かべ血をすすっている自分の姿が映っている。

爛々と輝く目は真紅に染まっていた。

翔は首の傷口から血を流している。

そこからたれる血をひたすらすすっては喉を鳴らして飲みこんでいる。

「ひっ！」

違う、こんなこと望んでない。

違う、血なんかほしくない。

違う、違う、違う。

急に覚醒してきた思考が自分を完全否定した。

「あ、ああ、ああぁ！」

翔をその場にほうり、駆け出した。

血が制服にたれる、鉄の味が消えない、頭が血を欲している。

涙があふれ出る。

止まらない、後から後からあふれ出てくる。

自分が何をしたのか認めたくなかった。

きっと夢なんだと言い聞かせた。

しかし、そんな努力もすぐに無駄になった。

玄関を抜け、グランドの隅に植えてある桜の木の下に行く。

桜はいつもと変わらず桜色の花を咲かせている。

桜の木の下には死体が埋まっている。

誰がそういったのか知らないが私がそうなりたい。

人目も気にせず、桜の木の前に倒れこむ。

涙で砂が顔に張り付く。

いいんだ、もう何もかも終わってしまえばいい。

こんなに汚れてしまった人間なんてもう人間じゃない。

人の血をすうのは人間なんかじゃない、吸血鬼と同じ悪魔だ。
もう疲れた、考えるのに嫌気がさした。

ふと影が覆いかぶさった。

少し視線を上げると濡れたハンカチを差し出す翔がいた。

「起きて、美鶴。」

嫌だ、お前の顔を見たらきっとまた泣いてしまう。

「涙は女の子を輝かせるけど、美鶴には笑っていてほしい。」

意味がわからない、なにも聞きたくない。

無理やり立たされた、濡れたハンカチで顔を拭かれる。

「こんなところで何をしてるの？女の子なんだから顔を傷つけちゃ駄目だよ。」

優しく微笑まれた、私に優しくするな。

「相馬さんが心配してたよ、走っていく美鶴を見て。」

こんな最低な女に話しかけるな。

「黙ってちゃわかんないよ？」

「どうして？」

「ん？何が？」

「何でそんなに優しいのよ！私なんかに！」

「美鶴が好きだから。」

「そんな冗談聞いてる場合じゃないのよ！！」

軽口に聞こえて唸ってしまった。

「俺がいつ冗談だって言った？」

優しかった表情が急に険しくなった。

「う、」

「俺は女の子を構ったりはするけど、その子を蔑ろにするような冗談は言わないし、気持ちを伝えるときは真剣に伝える。」

真剣な瞳が見つめてくる、しかし首筋の傷をみて現実を見た。

「違うの！そんなことが言いたかったんじゃない！！私は最低な女だから！！」

「いいさ、そんな美鶴が好きになったのも俺だ。」

わかってない。

「その首の傷、私がやったの・・・。」

「え？」

すこし曇った表情を見て、なきそうになった。

私なんかに真剣になってくれたのに。

「私は翔の血を吸ったの、この長い犬歯で首に食いついて、血を喉を鳴らしながら飲んだの！！！」

私はもう人間ではない、きっとそうだ。

「・・・」

翔もこれであきらめてくれる。

私なんかに真剣になってほしくない。

「いいさ、それでも。」

翔は優しかった。

それでも真剣になってくれた。

「俺は気にしない。それに好きで飲んだのか？好きで飲んだならそんなに落ち込まないだろ？きっと何か原因があるんだ。」

こんな私でも許してくれた。

「・・・本当に？」

「ああ。美鶴は笑顔の方がきれいだよ。」

涙が溢れた、きっと血を飲んだことよりも。

翔に嫌われることの方が怖かったのかもしれない。

出会ってからまだ浅い仲だけど、確かにその存在は大きかった。

「・・・あ、ありが、ありがとう。」

それぐらい翔のことが気になっていた。

「さあ、今はその話はやめよう。ゆっくりと後で相談しよう。」

「……ああ。」

翔がとても頼もしかった。

だからこのことに後悔は無い。

「翔……」

「ん？」

振り向いた翔に唇を重ねた。

第七話　きっと……また会える事を……願う（中編）（後書き）

大変遅くなりました、この話しぐらいからだんだん話しが進み始めます。

これからも長い付き合いができる事を願っています。

楽しみに待っていてくれた方々、どうもありがとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2656c/

†魔王降臨曲†

2010年10月12日05時18分発行